

「アメリカ横断ボランティア紀行」

■連載記事ダイジェスト

このボランティア紀行は、JICAの海外長期研修でアメリカ合衆国（以下、アメリカ）の国立公園や魚類野生生物局で実務研修を行った模様をご報告しながら、アメリカの保護区政策やボランティアの役割についてご紹介したものです。もともと3回で終了する予定だったのですが、結果として予告編を含め39回の連載になってしまいました。私本人もどこに何を書いたのか忘れてしまうほどです。そこで、各回でご紹介した内容をまとめてみることにしました。連載のインデックスとともにご活用いただければ幸いです。

■アメリカ横断ボランティア紀行 INDEX

http://www.eic.or.jp/library/pickup/usa_index.html

（連載ダイジェスト）

この連載は、JICAの海外長期研修に申し込むところから始まります。予想外、想定外のドタバタ劇は研修最後まで続きますが、特に最初のところは、第1話、第2話の2回分続きます。もともとの連載が全体で3回のお約束にもかかわらず、ここですでに超過が確定します。

研修先は最終的に2つの国立公園、マンモスケイブ国立公園とゴールデンゲート国立レクリエーション地域（のちに変更）に決まり、無事出発します。それまでに、9月11日の同時多発テロやその後のイラク爆撃の開始など、米国を中心とする国際情勢が緊迫していきます。

なお、導入編ではイラストが登場します。実物よりずっといいという評判です。

（導入編）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060131.html>

（第1話～5話：マンモスケイブ国立公園）

ボランティアを開始してみると、意外なことがいろいろ待っていました。ボランティアハウスの規定で、滞在者は例なく週40時間の勤務義務があるということから、妻も一緒に働くことになりました。虫が苦手な妻にとっては苦痛だったと思いますが、ここから2人でのドタバタボランティア紀行が始まります。第5話まで、とにかく毎日ボランティアとして様々な業務に参加しました。理屈ではなく、体験で学ぶ大切さを実感しました。

（第5話～7話：周辺の国立公園などへの遠征）

マンモスケイブ国立公園をベースとしていくつかの国立公園に遠征しました。第6話ではシェナンドア国立公園で、国立公園の入場料金について調査を行います。当時日本で検討の行われていた国立公園有料化に関連するものです。グレートスモーキーマウンテンズ国立公園のところでは、1920年代の国立公園設立運動、1930年代のニューディール政策との意外な接点について紹介しています。第7話でマンモスケイブを離れますが、そこで国立公園のビジネスプランの話やモニタリングネットワークといった全米レベルの話題を紹介しています。なお、マンモスケイブの見どころは少し間を空けて第27話に掲載しました。

(第8話～10話：1回目の大陸横断)

第8話からが1回目の大陸横断になります。まず最初に訪れたセントキャサリン国立野生生物保護区で、日本の国立公園との共通性に気が付きます。これ以降、アメリカの保護区と日本の国立公園の三点比較の視点を取り入れています。

第9、第10話は乾燥地域における保護区の現場を巡ります。メキシコ国境や規模の大きな保護区の管理の難しさ、ボランティアの重要性、料金徴収のさまざまな形態を見ていきます。また、日本から依頼があり、主要な公園標識を調査していきます。第10話では興味深い利用者アンケート調査の概要を紹介しました。

(第11話～18話：レッドウッド国立州立公園)

第11話からは2か所目の研修地、レッドウッドでの暮らしに移ります。こちらでも森林を中心とした生態系のモニタリングに従事しながら、さまざまなテーマについて研修を続けます。また、ヨセミテ、イエローストーン、アラスカなどにも積極的に「遠征」しました。また、ここでは事業評価や1960年代の国立公園をめぐる政治的な動きなどを紹介しています。また、地方分権の関係から、当時の石原東京都知事のご視察が行われることになり、連邦政府と州政府との役割分担について聞き取り調査を行います。また、その他にも膨大な項目について調査依頼が舞い込みます。のちに、これが最終報告の基礎にもなりました。

(第19話～22話：アラスカ遠征)

第19話から22話まではアラスカです。2週間ほどの滞在でしたが、驚くほど充実した調査を行うことができました。また、ここでは1970年代のアラスカをめぐる熾烈な政治的な駆け引きをまとめています。そこでレッドウッドとの意外な関係にも気が付きました。また、これは次の23話のレッドウッドでのインタビューにも続きます。

(第24話～31話：2回目の大陸横断)

第24話から第31話までは2回目の横断です。今回は主に保護区関係の国の施設を中心に訪問していきます。デンバーにある国立公園局のデンバーサービスセンター、自然資源プログラムセンター、ウェストバージニアにあるハーパースフェリーセンター、マザー研修所、そして国立保全研修センターなどです。それぞれの訪問で、国立公園の施設計画、レンジャー養成、パンフや標識のデザイン統一などについて紹介しました。

(第32話～38話：ワシントンDCでの研修とまとめ)

第32話からは3か所目の研修地、魚類野生生物局の本局国際課です。ここからは主にインタビューが中心となります。特に33話以降には、研修報告の骨格となったインタビューや日米保護区の主要なデータや予算の比較が続きます。

第37話でアメリカでの研修が終わり、第38話で全体を振り返ります。

アメリカ横断ボランティア紀行【導入編】

2006.01.31

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060131.html>

連載の予告編として執筆された。執筆者のイラストも登場！

はじめに

執筆者自己紹介。

(参考) 2年間の研修スケジュールと地図

アメリカでのボランティア

国立公園のボランティアは「VIP」と呼ばれる。一般市民からも高い評価を受ける。アメリカの国立公園では、長期ボランティアに対して無償の宿舎とユニフォームが貸与され、表彰や食事会もある。怪我などには国の保険も適用される。ボランティアは公園のスタッフであるとともに、国立公園の「ファミリー」の一員でもある。

ボランティアという名の公園スタッフ

長期ボランティアは「ボランティア」というより、むしろ「無給の公園職員」といった方が正確だ。

国立公園での仕事

アメリカの国立公園では、事務補助からメンテナンス、建設事業まで、職員がやる仕事なら、法執行（取締り）以外、たいがいの仕事がボランティアにも開放されている。

アメリカでのボランティア生活を体験して

国立公園における年間のボランティアの貢献はのべ400万時間以上、職員数に換算して2,000人以上。国立公園局の職員は約20,000人強であり、その約1割に相当。

市民のボランティアとしての貢献が、連邦政府やその他の組織の活動に対する「賛成票」としての役割を持ち、ある種の「直接民主主義」のような側面を持っている。巨額の直接寄付金とともに、こうした選挙以外の「民主主義」が、「自由の国アメリカ」を支えているのではないか。

(参考)「H教授の環境時評」(EIC ネット)の関連記事紹介

妻からのメッセージ：自己紹介

アメリカ横断ボランティア紀行（第1話）「アメリカでの研修！？」

2006.03.24

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060324.html>

日本の“レンジャー”が体験したアメリカの国立公園での長期滞在ボランティア。それは、日本の“ボランティア”観を覆す衝撃的な体験だった

突然の内示

夏休み明けに突然の海外研修の内示。それも締め切り、TOEFLの足切りとハードルは高い。

「資源管理」との出会い

国立公園の制度を検討する際、必ずといっていいほど「アメリカではどうなっているのか」ということを聞かれることから、行き先をアメリカ（合衆国）の大学院進学に絞る。大学を選定する段階で出会ったのが Natural Resource Management（自然資源管理）という研究分野。自然を資源のひとつと考え、管理の手法を研究する。

国立公園局受入れの「三つの条件」

研修期間前半の18ヶ月分の受け入れ先となる国立公園を自分で探すことができれば、実務研修が可能なのがあった。

ボランティアプログラムへの応募

各国立公園のボランティアプログラム募集情報は、国立公園局および連邦政府のホームページに掲載される。地域、期間、職種など様々な条件で検索ができる。

受け入れ先が決まらない！ —— ボランティアの希望と、公園側のニーズ

ボランティアはあくまで公園側とボランティア側とのニーズのマッチング。具体的に希望や関心を伝え合うことが必要。また、ボランティアコーディネーターの役割が大きい。競争の激しい大公園はあきらめる。

ボランティア制度と無料の宿舎

長期ボランティアの受け入れと公園の提供する無償の宿舎とは密接な関係。

妻からの一言：引越し準備

ボランティア生活で役に立ったものリスト。

（困み）公園紹介（ヨセミテ、イエローストーン、ヨセミテ国立公園）

アメリカ横断ボランティア紀行（第2話）「受入れ先決定～マンモスケイブ到着」

2006.04.20

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060420.html>

受け入れ決定

国立公園の受け入れは、ケンタッキー州にあるマンモスケイブ国立公園の科学・資源管理部門とサンフランシスコのゴールデンゲート国立レクリエーション地域のトレイル管理部門の2か所に決定。

アメリカのイラク攻撃開始！？

在京の米国大使館にビザを申請した矢先、米軍によるイラク攻撃が開始された。

マンモスケイブ国立公園到着、一路、マンモスケイブ国立公園へ！

テネシー州のナッシュビルに到着。レンタカーでマンモスケイブに向かう。ボランティアコーディネーターのメアリーアンさんから親切なメールが届く。公園の入り口看板の前で記念撮影。沿道には白いヤマボウシ（ハナミズキ）と紫色のレッドバッド（red bud）という木の花が満開だった。

妻からの一言：マンモスケイブ国立公園を選んだ理由

アメリカ横断ボランティア紀行（第3話）「ボランティア開始」

2006.06.08

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060608.html>

ボランティアハウスの規定から、妻と2人でボランティア勤務することになった。

ボランティアハウス

ボランティアハウスは木造平屋の一戸建て。個室が3部屋、トイレが2つ、衛星テレビ、ソファーセット、パソコンがある。冷蔵庫、電子レンジ、コーヒーマーカー、食器、なべ、巨大なオーブン、洗濯機、乾燥機まであり、着替えを持ってくれば、すぐにもボランティア生活に入れるだけの設備が整っている。

アメリカのボランティア制度は安上がり？

国立公園のボランティア制度は、公園にとっても参加者にとっても安上がり。ボランティアハウスやユニフォームは中古や再利用が多く、職員の人件費削減にもつながる。参加者にとっても公園のツアーが割安になったり、滞在費が無償だったり国立公園を安く楽しむことができる。

ボランティア勤務開始

到着当日から早速作業開始。所長などのご挨拶もない。公園内の各部署には自由に出入りすることができるため、公園内の様々な部署の職員にインタビューを重ねることになる。

私たちの上司、ブライスさん

インタープリター出身の上司、ブライスさん登場！ボランティアとしての初仕事はクリの木の苗木を植えること。本格的な野外作業が始まる。毎日マダニとの格闘。

ボランティアの1日

朝5時から夜10時までの早寝早起きの毎日。

妻の一言：マンモスケイプのボランティアハウス

アメリカ横断ボランティア紀行（第4話）「マンモスケイブ国立公園での生活」

2006.07.27

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060727.html>

アメリカ生活での足となった、愛車ポンティアック・モンタナ
アメリカは徹底した車社会。やむを得ず中古車を購入することに。

ミュールマン登場！

公園を流れるグリーン川に設置されたホーチンズフェリーのオペレーター、通称「ミュールマン」との出会い。頼りになるメンテナンス職員であり、妻の釣りの師匠。

国立公園の人手確保作戦

国立公園局の人材確保作戦の柱は公園のボランティア制度。SCA(Student Conservation Association)奨学生は優秀な学生を確保するシステム。

「女性の直感」——女性職員の思い切りと、ヨメさんの決断

デイビス夫妻との出会い。公園の肝っ玉母さんの存在のボランティアコーディネーター、メアリーアンさん。今回の研修は「女性の直感」で何とか実現したと実感。

妻からの一言：師匠の指導でブルーギルを釣って食べる。日本では外来種でもケンタッキーではフライの素材として人気の魚

アメリカ横断ボランティア紀行（第5話）「マンモスケイブ国立公園の夏」

2006.09.14

マンモスケイブ国立公園の夏（その1）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060914.html>

ケンタッキーの5月

ケンタッキー州の5月は、オークの緑も濃くなり、暑さも増して夏の到来を感じさせる。コナラやクヌギの仲間のオークは、カシワの葉のような切れ込みが特徴だ（写真3）。

（リンク）マンモスケイブ国立公園のライブカメラ

レジャーシーズン開幕！フィールド調査も花盛り。

フィールド調査の毎日

夏はフィールド調査の季節。私たちはあちこちの業務に引っ張り出され、大学の夏休みの終わる8月末まで、大いに活躍した（=こき使われた）。

両生類調査と歯科治療（6月）

雨天の夜間限定の両生類調査への参加や歯科治療などドタバタの毎日。

バターナッツ調査とハチ（7月）

野外調査としては本格的な調査となったバターナッツの木の調査に参加。調査中にスズメバチに刺され大騒ぎに。

ヘンリーさんのインタビュー（国立公園の事業評価）

国立公園内で行われる事業に関する事業評価制度の聞き取り調査。

マンモスケイブ国立公園の夏その2

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu060914-2.html>

「ガーリックマスタード」除去作業（外来種対策）

短期ボランティアの力。外来植物の除去にもボランティアが大活躍。

環境省からの依頼メール（その2）

今回の環境省からの依頼は、ビジターサービスやパンフレットなどに関する調査。公園のパンフレット、パークニュース、レンジャープログラム予定表（Ranger-Led Activity Schedule ; A5判1枚）などを紹介。

洞窟内の無脊椎動物調査

鍾乳洞内に生息する眼のないカマドウマの調査に参加。

妻からの一言：パンフレット翻訳

アメリカ横断ボランティア紀行（第6話）「遠征編 from Mammoth Cave」

2006.10.26

遠征編 from Mammoth Cave（その1）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061026-1.html>

シェナンドア国立公園訪問

（困み）（参考）シェナンドア国立公園

シェナンドア国立公園のスカイライン・ドライブ

スカイライン・ドライブはシェナンドア国立公園の目玉施設。路線のほとんどが尾根筋や尾根筋直下を通る。路傍の展望駐車場も大規模で設置箇所も多い。展望台や駐車場からの景色はすばらしい。思い切った施設整備、通景伐採には抵抗もあるものの、アメリカの国立公園の醍醐味を支えていることも事実。

ワシントン DC 訪問

3か所目の研修地を予定しているアメリカ内務省魚類野生生物局本局を訪問する。

国立公園の入場料収入

在米日本大使館の書記官に同行し、シェナンドア国立公園を訪問。国立公園における料金収入に関する調査は環境省からの依頼で、大使館が国立公園局本局とシェナンドア国立公園、私がマンモスケイブ国立公園を担当した。

遠征編 from Mammoth Cave（その2）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061026-2.html>

フィー・プログラム

レクリエーション・フィー・デモンストレーションプログラム（Recreational Fee Demonstration Program；通称「フィー・プログラム」）は、それまで国庫に納付していた国立公園の入園料や有料プログラムの徴収料金を、そのまま各部局の独自財源とすることができるという画期的な制度。徴収料金の80%を、料金が徴収された各国立公園の予算として使用することができる。

フィー・プログラムの導入に伴い料金上限規定が撤廃され、また収入の用途はビジターサービスに係る臨時職員の給与や施設の更新に限定。入場料金が大幅に値上げされ、施設の過剰整備が問題視されるという弊害も。

シェナンドア国立公園の入場料収入

シェナンドア国立公園のフィー・プログラム収入は全米でもトップ10に入り、年間予算は300万ドル（約3億3千万円、20%控除後）にもなる。

マンモスケイブでの料金収入

マンモスケイブ国立公園でも、この制度により公園内の標識やキャンプサイトの再整備、車道の付け替えなどが進められている。有料のケイブツアーから得られる収入は約110万ドル（約1.2億円、2002年度）。この予算を除く年間の通

常予算 570 万ドル（約 6 億円、2002 年度）の約 22%に相当。照明施設の更新とメンテナンス部門の縮小との関係。公園の縁の下の力持ちとベトナム戦争退役軍人。

グレートスモーキーマウンテンズ国立公園

グレートスモーキーマウンテンズ国立公園は、1920 年代から 40 年代にかけてアメリカ東部で興った国立公園設立運動で設立された公園のひとつ。この運動は、政府の主導ではなく、先見の明のある活動家や、研究者、資産家（ロックフェラー・ジュニアなど）、政治家、そして一般市民の自由意思と資金によって行われたところに特徴がある。

（欄外の脚注）国立公園設立運動（1920 年代）

1920 年代前半に全米各地で盛り上がった国立公園設立運動は、グレートスモーキーマウンテンズ、シェナンドア、マンモスケイブなど東部の公園設立の契機となった。国立公園局が設立された 1916 年から 1922 年までの間に、アメリカの国立公園の訪問客数は 356,097 人から 1,280,886 人に急増。地域の経済界は、先行き不透明で一部の企業の利益にしかない木材の伐採より、公園設立による地域の安定した経済発展と自然の保護を選んだことがその背景。単なる自然保護を目的とした運動ではなかった。

遠征編 from Mammoth Cave（その 3）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061026-3.html>

グレートスモーキーマウンテンズ国立公園における自然資源管理

グレートスモーキーマウンテンズ国立公園では、全分類群生物多様性インベントリープログラム（All Taxa Biodiversity Inventory : ATBI）」という大規模なプログラムが行われている。

ブラックベアー調査

グレートスモーキーマウンテンズ国立公園でのクマ調査に参加。泥だらけになりながらクマの個体数調査の実際を体験。調査は、テネシー大学にある米国地質調査所（USGS）【8】南部アパラチア地域現地研究室が担当。USGS 職員と学生インターンとともにワナにかかった 1 頭のクマを調査する。

国立公園の施設計画

アメリカの国立公園は、道路をはじめとする施設計画につきる。グレートスモーキーマウンテンズ国立公園でそれを痛感。日本では考えられない規模の展望台や車道施設に驚かされる。一方、そうした思い切った整備が行われることにより、原生地域への人の立ち入りが大幅に抑制される利点もある。

国立公園の整備と民間人保全部隊（CCC）（1930 年代、ニューディールと国立公園）

1933 年、フランクリン・ルーズベルト大統領のニューディール政策の一環として、民間人保全部隊（Civilian Conservation Corps : CCC）が組織され、失業者が国立公園などの公共施設整備に従事。深刻な大恐慌下であったにもかかわらず、国立公園システムの基礎となるインフラがこの時期、CCC により整えられた。

（国立公園局のライブラリー写真を掲載）

この時代の重要な変化には、コスト縮減のための政府機関の合理化もある。1933 年の連邦政府組織再編により、国立公園局は国立公園の管理に加え、当時その多くが森林局により管理されていた国立記念物公園、戦争省が管轄していた

戦跡及び戦争記念公園などを一括して管理することになった。これにより、連邦政府の公園地は国立公園局の管理下に集約され、現在の国立公園システムの原型が形成された。

遠征編 from Mammoth Cave (その4)

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061026-4.html>

CCC での生活

青年たちは公園内で軍隊スタイルの生活を送りながら公共事業に従事。その対価として一ヶ月 30 ドルが支給されるが、うち 25 ドルは家族に直接支払われた。このような若者により、今では考えられないような手間のかかる工事が急速に進められていった。

道路を主体とした管理

公園計画が道路中心であるため、利用や管理も道路が中心。国立公園の取締官の仕事も、路上でのスピード違反、違法駐車、その他不審な車の取り締まり。バックカントリーや歩道は、資源管理、メンテナンス、インタープリテーションなどの職員が把握し通報する。

公園内には車が多いが、滞留時間も短い。素晴らしい展望台のすぐそばまで車で乗りつけられる。利用者の満足度も高いと同時に、混雑緩和にも貢献する。絶好のカメラポイントがこれでもかという程あるため、他の利用者に気兼ねなくゆったりと写真撮影ができる。こうした施設整備はフロントカントリー区域に限定され、バックカントリーへの立ち入りはほとんどない。思い切った施設整備の利点でもある。

物資調達

コンサートや野球観戦など、ワシントン DC での観光。アジア系のスーパーマーケットで米、みそ、しょうゆ、納豆などの物資を調達。

妻からの一言：手作り納豆

アメリカ横断ボランティア紀行（第7話）「さよならマンモスケイブ」

2006. 11. 30

さよならマンモスケイブ（その1）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061130-1.html>

次の研修先だったゴールデンゲート国立レクリエーションエリアの担当者がいなくなってしまったため、研修先を選びなおすことに。

ゴールデンゲートに代わる研修先を求めて

マンモスケイブ国立公園での残留も含め、候補地を4か所に絞り込む。

受入れの回答

カールスバッド国立公園とグアダルルーペ国立公園から相次いで受入れ可能との連絡が入る。そして本命のレッドウッドからも受け入れの回答がきた。

キャンプ場改修工事

手作り感あふれるキャンプ場工事。仕上がりにはムラがあるが、地形にあわせて丁寧につくってある。構造が単純なため、補修も比較的容易だ。小型重機とメンテナンス部門をもつ国立公園だからこそできる小規模工事。

ホットスプリング国立公園

アーカンソー州にあるホットスプリング国立公園を訪問。ホットスプリングは温泉の泉源を守るために設立されたナショナルリザーブ（国立の保護地域）。設立は1832年とイエローストーン国立公園よりも古い。

さよならマンモスケイブ（その2）

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061130-2.html>

温泉法の起源？

ホットスプリングには日本の「温泉法」の原型が見える。泉源保護の仕組みばかりでなく、飲泉施設、成分表示板、足湯、公営浴場の整備などがある。

修理費2,700ドル！？

ポンティアックのトランスミッションが壊れた。ディーラーでは検査だけでも80ドル。修理の見積もりは30万円だった。公園職員に紹介していただいた地元の修理工場でお願いしたところ約7万円で直ってしまった。日本の修理工場がいかに良心的かわかる。アメリカの自動車修理事情の一コマ。

フロリダ旅行

エバーグレイズ国立公園（Everglades National Park）はフロリダ半島南部に広がる広大な湿地。公園内にはサギ、アメリカトキをはじめとする多くの鳥類、ワニ、シカなどが生息。公園は1947年に指定され、公園面積は約610,250ヘ

クタールと広大。ビジターセンターが5箇所あり、公園内ではボート、カヌー、キャンプ、釣りなどを楽しむことができる。一方、施設は古く、印刷物も職員も不足。巨大展望台がここにもあった。

ビスケイン国立公園 (Biscayne National Park) はエバーグレーズの東側の海岸に沿って広がる海洋公園で、1968年に国立史跡、1980年に国立公園に指定された比較的新しい国立公園。区域のほとんどは海洋と島。

ビッグ・サイプレス国立保護区 (Big Cypress National Preserve ; 1974年指定) は、エバーグレーズの北側に隣接する保護区で、面積は約291,600ヘクタール。区域内には民有地も含まれ、狩猟、石油採掘なども可能。ビジターセンターと必要最小限の歩道、キャンプ場以外に目立った利用拠点は無い。

さよならマンモスケイブ (その3)

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061130-3.html>

ワイルドケイブツアー

ワイルドケイブツアーは、ケイビングの醍醐味を体験するのにもってこいのツアー。パンフ翻訳のごほうびとして無料で招待される。

(囲み) ワイルドケイブツアー概要

所長インタビュー

ボランティアと公園の予算の問題。所長の経歴など。

モニタリングとモニタリングネットワーク

国立公園ごとにインベントリー (目録) を作成し、モニタリングを行うために、全米の公園ユニットを合計32の生物地理学的な (biogeographical) ユニットに分けてモニタリングネットワークを構築。米国南東部一帯の広葉樹林地帯ネットワークの事務局がマンモスケイブ国立公園内に設けられている。

(囲み) 米国南東部一帯の広葉樹林地帯ネットワーク

マンモスケイブ国立公園ビジネスプラン

米国では母親が家事を担当し、子どもが家にいるという従来の家族像は崩壊。両親が仕事を持ち家族がそろって旅行するのは難しい。また、お金の使途や家族のスケジュールを決めるのは女性だが、国立公園は女性の持つニーズに対応しきれていない。さらに、高齢化 (Graying America) やヒスパニック系米国人の増加にも注目すべき。人口ダイナミクスを先取りした公園の経営戦略が不可欠であり、ビジネスプランの狙いはそこにある。

イースタンナショナル (国立公園の協力団体)

イースタンナショナルという団体は、いわゆる国立公園の協力団体 (associate organization)。ビジターセンターで図書などを販売している。売り上げから経費を除いた収益を、それぞれの公園に還元。単に資金を提供するばかりでなく、公園の依頼により環境教育のマニュアルなどを作成、印刷して提供することもある。販売する品目は事前に所長の許可を得る必要があり、単に土産物ではなく、国立公園の自然や文化に関係する教育的効果の高いものに限られる。アメリカでお土産を買う際にはぜひビジターセンターで。

さよならマンモスケイブ (その4)

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061130-4.html>

アメリカ横断のルート取り

最初のアメリカ横断は、米国南部を通るルートを選択。

荷物

荷物の移動は、研修中、常に悩みの種だった。日本を出発するときには7箱だった荷物が、帰国時にはその3倍ほどになった。それも、3分の1は重い書籍や書類だった

引越しーさらばマンモスケイブ

ガソリン、ブランケット、ロウソク、水を積み込む。モンタナは西部開拓時代の幌馬車のような。座席以外はこれ以上荷物を入れる隙間すらない。

妻からの一言：アメリカでのクリスマス

(困み)

○カールスバッド鍾乳洞国立公園 (Carlsbad Caverns National Park)

○グアダルペマウンテンズ国立公園 (Guadalupe Mountains National Park)

アメリカ横断ボランティア紀行（第8話）「大陸横断編・その1」

2007.01.18

大陸横断編・その1（テネシー州ーミシシッピ州ールイジアナ州ーテキサス州）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070118-1.html>

最初のアメリカ横断の旅は、ナチェストレイス・パークウェイから。テネシー州の州都ナッシュビル近郊からミシシッピ州南部のナチェスまでをつなぐ総延長 444 マイル（約 710km）のパークウェイは、「ナチェストレイス」と呼ばれたかつての交易路。近代アメリカ合衆国建国の歴史が刻み込まれている。

（地図）横断ルート（テネシー州ーミシシッピ州ールイジアナ州ーテキサス州）

ナチェストレイス・パークウェイと、アメリカの“先史時代（pre-history）”

アメリカでは、ネイティブアメリカン、いわゆるインディアンの歴史は「pre-history」と呼ばれる。国立公園局の公園管理の目標の一つは、この白人入植者が入る以前の自然を再現し、公園を訪れた利用者が、かつて開拓民がはじめてそこに到着した際に得たものと同じ経験を提供すること。ビジターセンターでの展示も、ネイティブアメリカンや入植者に関する展示に重きが置かれている。エメラルド・マウンドという遺跡は地域最大級の規模で圧倒される。このような文化が失われてしまったことは実に残念なことだ。

セントキャサリンクリーク国立野生生物保護区

セントキャサリンクリーク国立野生生物保護区はミシシッピ川に面した河畔の湿地帯で、面積約 10,500 ヘクタール。初めて訪れる国立野生生物保護区（National Wildlife Refuge）。国立公園に比べると施設が簡素で少ない。施設も管理も日本の国立公園の雰囲気似ている。国立公園とは施設の質や整備水準も相当異なる。ビジターセンターは簡素な平屋の建物の一部、管理事務所と一体となっている。

親切な対応には驚かされたが、その後の経験から魚類野生生物局の職員に共通していることがわかった。関係者とのコミュニケーションを大切に、相互理解のためには決して労を惜しまない。

保護区内での狩猟 —— 頭数調整の役割と、国民の権利としての保護区の「利用」

多くの野生生物保護区では狩猟が認められている。狩猟には狩猟許可をとり、狩猟スタンプ（切手、印紙）を購入する。州と保護区の規制で定められた方法、時期、数量などを守り、捕獲した野生生物の頭数などを報告。なお、狩猟料金収入は、フィー・プログラムの一環として徴収額の 8 割が保護区に還元される。

保護区側は生息数などをモニタリングし、狩猟頭数の上限や期間を決定。オオカミなどの捕食者の機能をハンターが果たしている。

また、狩猟行為を含め、保護区の利用は国民の権利。車椅子用の狩猟小屋もあり、小屋の前には 0.5 ヘクタール程度の草が整備され、餌となる草の種子や肥料がまかれる。かなり人気がありリピーターも多い。

外来生物

外来種の浮き草が問題。駆除には農薬が有効だが厳しい環境影響評価が必要で使用が困難。また、ミシシッピ川全体で広がっているため、保護区で管理できるのは河川とつながっていない堤防の内側のみ。国立野生生物保護区といえども、保護区の境界線を越える問題には苦慮している。

大陸横断編・その1（テネシー州ーミシシッピー州ールイジアナ州ーテキサス州）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070118-2.html>

保護区で石油採掘！？

野生生物保護区では石油の採掘権を購入していないため、現在も掘削が継続。石油採掘施設の更新工事ができないため、施設が老朽化すると掘削も終了する。

堤防で囲まれた元干拓地にはポンプや水門が設けられた池があり、水鳥の渡りのシーズンには水位を高く、それ以外は水位を下げる。このような人工の池を「impoundments（貯水池）」と呼ぶ。

受け付けは所長の息子がボランティアで務める。雰囲気は日本の小さな自然保護官事務所に似ている。

職員1人あたりの管理面積は、日本の国立公園が約8,200ヘクタール、アメリカの国立公園が約1,650ヘクタール、国立野生生物保護区が約13,000ヘクタール。日本としては野生生物保護区の管理方法の方が参考になるのではないか。

砂漠の旅

ビッグバンド国立公園を訪問。リオ・グランデ川をはさんでメキシコと国境を接する。公園は広大だが、ビジターセンターは拍子抜けするほど小さい。利用者数に応じた施設設計が印象的。

入場者数が少ない場合には入口ゲートに職員を配置せず、ビジターセンターでサービスと引き換えに入場料を納付。特にサービスを要求しないビジターからは、入場料を徴収しない。合理的で柔軟な料金徴収方針。

大陸横断編・その1（テネシー州ーミシシッピー州ールイジアナ州ーテキサス州）[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070118-3.html>

ビッグバンド国立公園 科学・資源管理部長のインタビュー

科学・資源管理部門の年間予算は約6,000万円で、内訳のほとんどは人件費が占める。ボランティアはここでも大きな役割を果たすが、予算は約140万円に過ぎない。

（困み）ビッグバンド国立公園科学・資源管理部門のポスター一覧

ビッグバンドでの主な資源管理問題

ここでも、やはり国立公園の境界を越えて影響を受けている問題には無力。

(1) リオ・グランデ川の水質及び水量

公園を流れるリオ・グランデ川の水量が減少し、水質も悪化。上流での農業用水と排水が原因です。姿を消した魚類や貝類も少なくない。アメリカ、メキシコ両国側の水資源利用とも関係し、根本的な解決は困難。

(2) 大気汚染

雄大な景色も大気汚染による霞により損なわれている。公園区域に隣接する火力発電所の排出する硫黄酸化物の影響。

(3) 外来生物

周囲の畜産業者によって導入された牧草などによる悪影響。化学薬品の使用は環境影響評価が壁となり、ボランティアによる抜き取り作業が頼り。

国際協力

リオ・グランデ川をはさんでメキシコ側の野生生物保護区に技術支援等をしなが、外来生物対策にも取り組む。

公園の資源管理におけるボランティアの位置付けについて

野生生物の専門家は1名しかおらず、ボランティアの貢献が不可欠。ただし、ボランティアハウスと執務スペースが限られており、拡充は困難。

乾燥地における自然資源管理とボランティア

乾燥地は夜間や泊りがけの調査も多く、ボランティアが不可欠。ボランティアにとっても南部にある乾燥地は冬がベストシーズンであり、リタイア後の人生を楽しむ選択肢となっている。

大陸横断編・その1（テネシー州ーミシシッピ州ールイジアナ州ーテキサス州）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070118-4.html>

ボランティアに求められる専門性と資源管理業務

業務に応じて、ボランティアには異なった“専門性”が求められる。国立公園の“花形”、インタープリテーション業務では現任教員や退職者は大歓迎。接客業務には人生経験が豊富で人格円満な高齢者。資源管理業務やメンテナンス（維持管理）業務なら、多少の野外活動の知識と体力があれば、誰でも参加できる。余剰人員も柔軟に受け入れられる。ボランティアプログラムの運営に不可欠な要素。

国立公園における霞の問題

国立公園側の対策の大きな柱はモニタリング。大気汚染の状態を継続して観測し、そのデータを持って、連邦政府や州政府に規制の強化を働きかける。大気モニタリングにはいくつかの全米ネットワークがあり、各国立公園の大気モニタリングステーションは、その中核的な役割を担う。継続的に観測されたデータや写真に裏付けられた説明は説得力を持つ。一見何の変哲もない“風車のついた小さな小屋”であるモニタリングステーションであるが、その果たす役割は大きい。

（マンモスケイプのモニタリングステーションの紹介）

妻からの一言：運転免許証をとった！

アメリカ横断ボランティア紀行（第9話）「大陸横断編・その2」

2007.03.15

大陸横断編・その2（テキサス州→ニューメキシコ州→アリゾナ州）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070315-1.html>

（地図）横断ルート（テキサス州→ニューメキシコ州→アリゾナ州）

外国語標識の調査依頼

日本では、当時愛知万博を約1年後に控え鉄道や空港の案内標識の多言語化が進んでいた。国立公園についても、中国、台湾、韓国などからの観光客が増加、アメリカの標識の事例調査を頼まれた。横断しながら様々な標識の写真を撮影する。

国立公園局の標識類整備マニュアル

国立公園局の政策室（office of policy）のページで国立公園管理に関するマニュアル（局長通達；Director's Order）に一通り目を通す。国立公園局は多言語表記に慎重であり、ピクトグラフの活用を推奨している。

標識をめぐる日米の違い

アメリカのメリットはやはり英語自体が国際的に通用する言語であるということ。特に地名などはアルファベットでほとんどの訪問者が認識できる。注意、案内などにはピクトグラフを活用し、詳しい情報は多言語（スペイン語、フランス語、ドイツ語、日本語など）の外国語パンフレットを用意する。日本でも、ピクトグラフの標識+外国語パンフレットという組み合わせならいいのではないか。

また、日本語には漢字があるので少ない文字で表記ができる、縦書きができる、などのメリットもある。

グアダルーペ国立公園とカールスバッド鍾乳洞国立公園

ボランティアの受け入れを表明してくれた2公園を訪問。カールスバッドとグアダルーペは対照的だ。鍾乳洞があり集客力のある小公園（前者）と、面積は大きくダイナミックであるが観光の面では魅力の少ない大公園（後者）。地元をささえる経済的貢献の大小と、公園が守る自然環境の質とのギャップ。

大陸横断編・その2（テキサス州→ニューメキシコ州→アリゾナ州）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070315-2.html>

ホワイトサンズ国立記念物公園

日本人にも人気の公園。真白いジブサムサンド（石膏の砂）の砂丘が続き、風景は幻想的。おもしろい形をした屋根つきのピクニックベンチや、この地域特有の建物のデザインを生かしたビジターセンターもある。

サガロ国立公園

入場料金が公園の入口ではなく、サガロ（サボテン）が立ち並ぶ周回道路の入口で徴収される。有料公園といっても、料金を「とれるところで」「とれる人から」徴収するという考え方がおもしろい。サボテンを見る時間がなくてビジターセンターに立ち寄るだけなら、入場料を徴収する必要はなく、また支払う価値もない。

国立公園は、自然の魅力に対してではなく提供するサービスに対して対価を徴収する。パークレンジャーによる自然解説プログラム、快適な利用施設、充実したパンフレットやパークニュースなどの印刷物などがあってはじめて、公園自体の持つ自然の美しさや印象的な景観が総合的に評価され、支払いの意思が生まれる。日本の国立公園が自然の風景地の保護を目的とした規制的な管理手法をとっているのに対し、アメリカの公園が「公園地の経営」に重点を置いた管理を行っている。料金徴収の考え方も自ずから異なるが、公園の「サポーター」の裾野を広げた上で、十分なサービスの対価として料金を徴収するアメリカの手法を十分理解した上で日本に合う方式を検討すべきだろう。

大陸横断編・その2（テキサス州→ニューメキシコ州→アリゾナ州）[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070315-3.html>

カベザプリエタ国立野生生物保護区

国立野生生物保護区には一般向けの利用施設はなく、サボテンなどを見たい利用者にはオルガンパイプカクタス国立記念物公園を勧める。保護区では利用施設の代替としてレクチャースペースを設けている。テレビとビデオデッキ、DVDプレイヤーが設置され、「ライブラリー」を自由に閲覧できる。野生生物は夜間に活動することも多く、いくら施設を設けても観察は難しく、またそれが生息環境にも悪影響を与える。

オルガンパイプカクタス国立記念物公園

ここにも入口に料金ゲートはなく、公園内にある有料の周回道路入口のみで料金が徴収されている。合理的で納得のいくシステム。

カベザプリエタ国立野生生物保護区所長インタビュー

国立公園局は「景観地」の管理を主眼としているが、魚類野生生物局は野生生物の生息地域保全が第一。また、魚類野生生物局は保護区外の民有地の保全にも取り組む。保護区の境界を越えて移動する野生動物の保護には、保護区内の保全だけでは十分ではない。

大陸横断編・その2（テキサス州→ニューメキシコ州→アリゾナ州）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070315-4.html>

野生生物保護区管理に関する課題

所長インタビュー。保護区には、個体数調整のための狩猟を認めている一方で、個体数を保つための水のみ場が設置されている。ハンターが狩猟枠を自分たちの『既得権』と考え、水のみ場の撤去に反対している。ハンターグループは地元の住民から構成されており、政治的な問題に発展することもある。

「野生生物より人間の管理の方が格段に難しい」

メキシコとの国際協力

この野生生物保護区は、境界を接するメキシコ側の保護区に対して技術支援を実施。メキシコ政府は中央政府にお金を渡しても現場までは届かないため、技術協力や航空機などのチャーター代を直接負担することが支援の中心。また、不法入国、麻薬取引、人身売買などの犯罪行為やその取り締まりでの生態系への影響も大きい。

妻からの一言：車窓から

アメリカ大陸を横断する車の車窓からは、地形、植物、動物、家の造りや大きさ、土の色、気温、湿度、人の様子など、州が変わると違う国に来たような変化がある。

アメリカ横断ボランティア紀行（第10話）「大陸横断編・その3」

2007.05.17

大陸横断編・その3（アリゾナ州～ネバダ州～カリフォルニア州）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070517-1.html>

（地図）横断ルート（アリゾナ州～ネバダ州～カリフォルニア州）

（困み）グランドキャニオン国立公園紹介

グランドキャニオン国立公園

車を降りてすぐが大渓谷が見えてしまうのは少々拍子抜けするが、これなら車椅子の人でも簡単に観光することができる。それにしても、裕福そうな白人の高齢者ばかりが目につく。さらにグランドキャニオンは外国人観光客も多い。

国立公園局のホームページには、社会科学に関する調査研究のページがあり、様々な調査報告書が掲載されている。いくつか関連の深い調査を引用。

<「国立公園」という言葉から連想するものは何ですか？>

自然の美しさや野生動植物、国の遺産といったものが上位を占める。「レクリエーション」と「保護・保存」がいずれも7%と低く、また同じ割合で「官僚的・政府」という回答があるのはおもしろい。

<国立公園に行かない理由>

「興味がない」はわずか10%。多くが「距離」と「時間」を挙げているのは、アメリカの国立公園が僻地の原生地域にあるという「宿命」を裏付け。

<学歴別にみた過去2年間に国立公園を訪問した割合>

ビジターの学歴を見てみると、高卒者は82%が過去2年間に国立公園を訪問していない。その一方、4年制大学の卒業生は44%が過去2年間に国立公園を訪問している。高学歴ほど国立公園を訪問する割合が高い。

<人種別の過去2年間に国立公園を訪問した割合>

アフリカ系アメリカ人の訪問した率が極端に低い。この問題については、以前から調査が行われている。

大陸横断編・その3（アリゾナ州～ネバダ州～カリフォルニア州）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070517-2.html>

グランドキャニオンビレッジ

日本の国立公園にも「集団施設地区」という地区があり、米国国立公園内の「ビレッジ」に似ている。もしかするとこのような「ビレッジ」からアイデアを得たものなのかもしれない。

（困み）集団施設地区

ビジターセンターでのレンジャープログラム

40分程度のレクチャーは、ビジターセンターの展示をうまく使った素晴らしいもの。大勢のビジターに効率的にレクチャーする工夫がある。

グランドキャニオン国立公園のビジターセンターは、細長い体育館のような広々とした建物で、控えめな展示とさすがに並ぶレクチャースペースが一隅にある。もともとはシャトルバス導入のターミナルとして設計したものであったそうだが、その構造をうまく生かしている。

スーパーマーケットでの買い物

公園内の売店であるパークストアはさすがに大きい。さながらスーパーマーケットのようで、驚くほど品物も充実、生鮮食料品からお土産までほとんど何でも揃う。その上、アウトドア用品も充実。ここでようやくブタンガスボンベやプロパンガスカートリッジコンロを購入。以降、ほぼ毎日ご飯を炊くようになった。それにより少しずつ体力も回復。

レイクミード国立レクリエーション地域

レイクミード国立レクリエーション地域は、フーバーダムのだま湖を利用した公園。国立レクリエーション地域はレクリエーション需要に対応するために整備された公園であり、日本でいえば国土交通省の所管する国営公園に近い。

(囲み) レイクミード国立レクリエーション地域

大陸横断編・その3 (アリゾナ州～ネバダ州～カリフォルニア州) [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070517-3.html>

ラスベガス

カジノ観光は我慢し、いつもの早寝早起きに徹する。カジノの収入のためか、ホテルの室料は低価格で助かった。

デスバレー国立公園

デスバレー国立公園は形も大きさもちょうど長野県と同じ。デスバレーはさながら自然史博物館そのもの。雄大な地形が広がる。デスバレーを越えれば目指すカリフォルニア州だが、デスバレーが大きいうえに、カリフォルニア州の面積は日本の国土面積の約1.1倍。同州北端にあるレッドウッドまでの道のりはまだ遠い。

(囲み) デスバレー国立公園

サンフランシスコ到着

デスバレー国立公園を抜けカリフォルニア州に入ると、小さな盆地全体が白煙に覆われ、ひどい大気汚染だ。アメリカの環境対策は素人目に見てもずさんだ。大気汚染防止法 (Clean Air Act) などの画期的な規制法を世界に先駆けて導入している一方で、古い発電所は硫黄酸化物や水銀を垂れ流している。

サンフランシスコでは、日本人街にゆっくり滞在。公用旅券の渡航先追加手続きや物資調達、洗濯、インタビューの整理、定期報告書の提出を済ませる。

大陸横断編・その3 (アリゾナ州～ネバダ州～カリフォルニア州) [4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070517-4.html>

「ジャパントウン」

サンフランシスコの日本人街には「日本」があった。快適なホテル、日本食スーパー、レストラン、ラーメン店、そして日本の書店。ワサビ、醤油、酢、歯磨き粉など両手に抱えきれないほどの物資を購入しホテルにとんぼ返り。書店では立ち読み後に禅語の本を購入。禅など日本では見向きもしなかったのに、一つ一つの言葉が心に染みる。

ゴールデンゲート国立レクリエーション地域

本来であればマンモスケイブ国立公園の次の研修地であった、ゴールデンゲート国立レクリエーション地域を訪問。サンフランシスコ湾を囲む広大な旧軍用地を公園化したもの。旧兵舎は長期滞在のボランティアのための宿舎に転用され、ボランティアプログラムが充実。立地がいいため環境教育プログラムも有名。

ミュア・ウッズ国立記念物公園

サンフランシスコ一帯はレッドウッドの南限で、公園にもレッドウッドの大木が残されている。かつてはここもレッドウッドの原生林に覆われていたという証だが、現在はこの記念公園の他には、「パロアルト（スペイン語で「高い木の意）」や「レッドウッド・シティ」などの地名にその名残をとどめるのみ。

（囲み）ミュア・ウッズ国立記念物公園

妻からの一言：ルート66

アメリカ横断ボランティア紀行（第 11 話）「レッドウッド国立州立公園到着」

2007. 06. 28

レッドウッド国立州立公園到着[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070628-1.html>

サンフランシスコからレッドウッド国立州立公園までの、太平洋岸に沿ったカリフォルニア州道 1 号線を北上。荒々しいがすばらしい海岸風景。

（地図）カリフォルニア州北部太平洋岸地域位置図

（地図）横断ルート図（マンモスケイプ～レッドウッド）

レッドウッド国立州立公園へ向けて

途中、ポイントレイズ国立海岸のビジターセンターに立ち寄る。沿道には小さな集落が点在するのみで、米国東部のケンタッキー州などに比べるとさびしい雰囲気。しかしながら、雨が多く湿潤で荒々しい自然は、アメリカの持つ「自由」や「自然の豊かさ」のようなものを連想させる。

（囲み）ポイントレイズ国立海岸

フォートブラッグ

ようやく横断も終わるといところで歯の詰め物がとれる。

フンボルトレッドウッズ州立公園

公園内には、「アベニュー・オブ・ジャイアント（巨木の並木道）」と呼ばれるかつての幹線道路が残っている。幹線道路といっても片側一車線の細い道路だ。原生林のまっただ中を通っているの、巨木の間を縫うように右に左に曲がりくねる。

レッドウッド国立州立公園到着[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070628-2.html>

ユーレカ周辺のレッドウッド伐採の歴史

1848 年、付近に金鉱が発見されるとすぐに現在のユーレカに集落が形成された。当時はまだ道路がなかったため、人間や物資はユーレカなどの港に船で運搬されたそう。ところが、金の埋蔵量は予想よりはるかに少なかったために、その代わりとしてレッドウッドの伐採が開始された。国立公園設立までの 120 年ほどでレッドウッドは切りつくされてしまう。

生活の基盤を根こそぎ剥奪されたネイティブアメリカンや、頻発する洪水被害の続いた入植者の集落など含め、この地域には、レッドウッド伐採による負の遺産だけが残されているように見える。

レッドウッド国立州立公園到着[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070628-3.html>

国立公園の「南部管理センター（South Operation Center）」、通称 SOC（ソック）初出勤。

ボランティアハウス入居

レッドウッドの森の中のボランティアハウス。巨大ナメクジ、バナナスラッグとの出会い。部屋の中はまるで廃墟のようだ。埃の積もった家具やばらばらのベッドのフレームが乱雑に置かれ、足の踏み場もない。

レッドウッド国立州立公園到着[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070628-4.html>

パン焼き機購入

宿舎が近くの都市から離れているため買い物になかなか行けないため、パン焼き機を購入する。日本の某有名メーカー製の一斤タイプが中古で格安の10ドル。焼きたてのパンは市販の食パンとは比べ物にならないほど美味しい。アメリカではパン用の粉やバターも安い。一方、市販の食パンは、日本の1斤タイプの2~3倍の量で1ドルしないものもある。どうすればこんなに安くなるのかわからない。ただ、焼いてもジャムをつけても不思議なほど美味しくなかった。

妻の一言：スリフトショップ

アメリカのリサイクルショップ。

レッドウッド国立州立公園の歴史概観

(Official National and State Parks Handbook より抜粋翻訳)

レッドウッド保護連盟の設立と活動。レッドウッド国立公園設立までの長い道のり。

アメリカ横断ボランティア紀行（第12話）「レッドウッドの森のボランティア」

2007.08.30

レッドウッドの森のボランティア[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070830-1.html>

（地図）レッドウッド国立州立公園位置図

ジェイソンとスコット

着任後、早速レッドウッドの森林調査方法の練習。ジェイソンには日本人の血が流れているが日本語は話せない。

レッドウッド原生林回復計画

レッドウッド国立公園内には伐採跡地が含まれている。特に、1978年に拡張された国立公園の区域の大部分は伐採跡地で、レッドウッドとダグラスモミの二次林が広がる。この二次林を間伐して、レッドウッドの原生林に近い森に回復させる試みが「原生林回復計画」。その立案に必要なデータを収集する作業に参加した。

レッドウッド二次林調査

GPSで調査地点を特定し材積量調査を行う。二次林は暗く荒れている。調査方法は統一されているがデータ管理がずさん。几帳面な妻の記録とデータ入力などが思わぬ評価を受ける。歩測で行われていた林内での距離測を改善するためレーザー距離計を導入。

レッドウッドの森のボランティア[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070830-3.html>

自動車通勤

徒歩通勤だったマンモスケイブと異なり、レッドウッドでは毎朝片道約10分の自動車通勤。途中、エルク（ウマほどもある大型のシカ）が道端のメドー（草地）で草を食んでいる。道路は片側一車線で幅員もそれほど広くはない。そこを伐採されたレッドウッドやダグラスモミなどを満載したトラックが行き来する。伐採業はいまだにこの地域の主要産業だ。

レッドウッドの森

レッドウッドの森を一言で表現すれば、「恐竜の森」。直径1メートルをゆうに越えるレッドウッドがローマ建築の柱のように立ち並ぶ。林床には一面巨大なシダが生い茂っている。原始の森の不思議な光景。

レッドウッドの森のボランティア[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu070830-4.html>

レッドウッドの歴史と3種のレッドウッド

レッドウッドは別名セコイアとも呼ばれ、1億数千年前、恐竜と同時代に最も栄えた裸子植物の生き残り。現在は、このレッドウッド国立州立公園に生育するコーストレッドウッド（Coast Redwood、学名 *Sequoia sempervirens*）、米国

西部シエラネバダ山脈西麓のセコイア国立公園のジャイアントセコイア（Giant Sequoia、学名 *Sequoiadendron giganteum*）と中国のメタセコイア（Dawn Redwood、学名 *Metasequoia glyptostroboides*）の3種が残るのみ。ジャイアントセコイアは世界一大きい（太い）樹木、レッドウッドは世界一高い樹木。

英語能力向上？

マンモスケイブとは異なり、レッドウッドにはしっかりとしたボランティアコーディネーターがおらず、自分のことはすべて自分で処理することが求められる。歯科治療も、診療してくれる歯科医を見つけることから始めなければならない。自然と英語力が向上しているのがわかる。

<妻の一言>

歯の治療費見積もりが総額 40 万円！親不知の抜歯の際は看護師が体重をポンドに換算できず麻酔量を間違えられ、危険な状態に。

アメリカ横断ボランティア紀行（第13話）「レッドウッドのボランティア（野生生物編）」

2007. 11. 01

レッドウッドのボランティア（野生生物編）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu071101-1.html>

歩道の環境影響評価

ローソンヒノキ根腐れ病の拡大防止のための調査に従事。歩道の付け替えに向け、NEPA（国家環境政策法）に基づく環境影響評価のための基礎情報を集める。ちなみに、このローソンヒノキを買ってくれる大得意は日本の寺社仏閣。立て替えられたお寺の太くて立派な柱がどこから来るのか、やっと謎がとける。

野生生物部門からの誘い

多忙な野生生物部門からも調査補助の声がかかるようになる。

レッドウッド国立州立公園内の野生生物

原生林では、ニシアメリカフクロウ（Northern Spotted Owl）が繁殖。53キロメートルに渡る原生的な海岸線には、サケ・マス類が遡上する大小河川やシロチドリ（Snowy plover）の繁殖地もある。その他、エルク（Elk）、クマ（Black bear）、マウンテンライオン（Mountain lion）、コヨーテ（Coyote）、ブラックテイルディアール（Black tail deer）などが生息。

エルク調査

GPS テレメトリー調査の補助。位置情報の保存された首輪の回収のため丘陵地を探し回る。機材は先進的だが、回収など実際の調査には多くの人手が必要だ。

レッドウッドのボランティア（野生生物編）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu071101-2.html>

サケ・マス類モニタリング

ゴムの胴長靴（ウェーダー）を履いて小河川を遡上する。偏光レンズのメガネをかけ、サケ・マス類の目視調査、産卵場所、死骸の確認作業を行う。

シロチドリモニタリング

原生的な海岸線に沿った海岸線を縦走。海にはアザラシが泳ぎ、上空をペリカンが滑空する。自然が好きな人にとってこの国立公園での仕事は天職だ。それにしても、こんな小さな鳥数羽のため、職員が毎月この砂浜を縦走しているという事実には驚かされる。

レッドウッドのボランティア（野生生物編）[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu071101-3.html>

集水域修復事業調査

野生生物部門の次は地質部門。土砂流出を防止するための林道などの除去。事業費は3年間で200万ドル（約2億4千万円）。

カリフォルニア州沿岸地方助言会議

国立公園の南部管理センターで、「カリフォルニア州沿岸地方助言会議」（California Coast Provincial Advisory Committee、通称PACミーティング）が開催された。各政府機関、地元住民、有識者、木材関係者などが参加。この会議が10年以上経過しても形骸化しない理由のひとつが、計画に付随するモニタリング調査の存在。ニシアメリカフクロウのモニタリング調査結果が関係者の利害調整の根拠となる。調査の担い手が、国立公園局や魚類野生生物局の資源管理部門だ。

続・ローソンヒノキ調査

この調査は歩道に沿って歩くため、いつもの二次林調査よりもずっと楽だ。それに、「調査」と称してレッドウッドの原生林を散策できるという魅力もある。GPSを使った歩道調査。散策好きなボランティアに最適だろう。

レッドウッドのボランティア（野生生物編）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu071101-4.html>

妻の一言：釣りとかヌー、河口付近の高台からのホエールウォッチング。

アメリカ横断ボランティア紀行（第14話）「ヨセミテ国立公園へ！」

2008.01.10

ヨセミテ国立公園へ！[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080110-1.html>

セコイア・キングスキャニオン国立公園

セコイア・キングスキャニオン国立公園とヨセミテ国立公園は、シエラネバダ山脈の懷に位置する。セコイア国立公園とキングスキャニオン国立公園はそれぞれ独立した国立公園だが、区域が隣接していることもあって、共通の公園事務所が管理を行っている。アメリカの国立公園は、原則的にはそれぞれ個別の設置法に基づいて設立され、それぞれ異なる法的な保護や利用目的を持っている。ただ、区域が近接しているような公園では、管理組織を合理化する目的で1つの事務所が複数の公園の管理を担当する例が見られる。

（日本の自然公園との比較、日本のブロック制度）

世界一の巨木、ジャイアントセコイア

ジャイアントセコイアは、レッドウッド国立州立公園に分布するコースタルレッドウッドと共通の祖先を持つレッドウッドの一種で「ずんぐりむっくり」の樹形が特徴的。国立公園局のマークのデザインの一部にもこの木があしらわれている。

ヨセミテ国立公園へ！[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080110-2.html>

（困み）キングスキャニオン国立公園、セコイア国立公園 概要

科学に基づく自然資源管理 ——管理火災

管理火災（prescribed burning, prescribed fire）は、延焼防止対策を講じた上で、野火に替わって人工的に森林火災を発生させることにより、あらかじめ森林内に蓄積された倒木や落枝を定期的に燃やし、火災の被害を軽減することを目的とする。

1988年のイエローストーン国立公園の森林火災では、およそ半分の面積に相当する森林が燃失。1989年に関係省庁共同の報告書が取りまとめられ、同国立公園の火災管理の方法が適当であったとの結論が得られた。森林火災は自然のプロセスの一部であり、公園内の自然資源の管理に管理火災を取り入れるということが一般にも認められる契機となった。

国立公園管理の課題

セコイア・キングスキャニオン国立公園が抱える問題の中でも、大気汚染の影響は深刻。西海岸の人口密集地帯から流入してくる大気汚染物質は、樹木の抵抗性を損ない、害虫による立ち枯れを助長している。

また、地域固有の生物の生育環境も悪化しており、例えばシエラネバダの山岳地帯にしか生息しないとされるマウンテン・イエローレッグ・フロッグ（Mountain Yellow-legged Frog）というカエルの個体数が急激に減少している。

マンザナー国立史跡

国立公園の歴史保存の取り組み。負の歴史であっても、その過ちを国立記念物公園という形で後世に伝えようという米国政府の姿勢。

ヨセミテ国立公園へ！ [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080110-3.html>

ヨセミテ国立公園の誕生

ヨセミテ国立公園は、1890年に国立公園として設立された。1872年に世界初の国立公園としてイエローストーン国立公園が設立されてから18年後。「ヨセミテ」といえば、「国立公園の父」と呼ばれるジョン・ミューアが活躍し、アメリカの国立公園制度の原型が形作られた地であり、その意味では米国国立公園の発祥の地といえる。（1800年代後半の国立公園設立運動の紹介）

（困み）国立公園局組織法（National Park Service Organic Act of 1916）からの抜粋

ヨセミテ国立公園のダム湖！？

アメリカの国立公園の歴史の中でも、最大の汚点のひとつといわれているのがヨセミテの中にあるヘッチヘッチー湖（ダム湖）。しかしこの問題は、1916年の国立公園局設立の契機を提供し、また、自然保護団体も世論形成能力と政治的な運動の必要性を痛感し、組織の規模拡大や財政基盤の強化、ロビー活動が進んだ。

ヨセミテ国立公園到着！

道路脇の広々とした駐車場に車を止めるとすぐ目の前に雄大な景色が広がる。拍子抜けするほど簡単に、車やバスですばらしい風景を楽しむことができる。これこそがアメリカの国立公園の魅力だ。

ヨセミテバレーの周回道路

「車で思う存分走り回ってください」といわんばかりの施設設計。ヨセミテバレーとは規模が違うものの、日本の上高地といろいろな意味で共通している。氷河によって形成された荒々しい地形、アクセスが1箇所に限られる盆地と集中する利用客。美しい森林と澄明で豊かな川の流れ。違うのは、まさに道路と自家用車の管理だ。

上高地では、昭和50（1975）年の夏に日本で初めてのマイカー規制が導入された。利用者は麓の駐車場に車を止め、シャトルバスで上高地に入山する。また、上高地のバスターミナルより奥には車道はなく、盆地内は年中「歩行者天国」だ。

そんな光景に慣れていた私にとって、ヨセミテでのドライブには罪悪感もあった。

「やっぱりこの道路建設はやりすぎではないか？」

そんな考えが頭を離れない。その一方で、「これはすごい」という気持ちも抑えきれない。車でどこへでも自由に行ける。駐車場にも余裕がある。次第に「これがアメリカの国立公園なのだ」という気持ちが強くなる。郷に入らば郷に従え、ここでは私は一介の外国人観光客に過ぎない。

資源管理上の課題

車両の路上駐車、クマの餌付け、水質悪化、そしてヘイズ（霞）による景観への影響。

ヨセミテ国立公園へ！ [4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080110-4.html>

NPS（国立公園局）オープンハウス（公園内開発事業説明会）

国立公園局「オープンハウス（NPS Open House）」は、公園内で行われている各種の事業について職員が担当事業を説明するもの。はっきりなしに利用者が訪れる。インタープリターによる説明も効果的。データは資源管理部門が提供する。数値データに基づく説得力のある解説も魅力。パブリックコメントはどうしてもネガティブな意見がほとんどを占めるが、この説明会によりサイレントマジョリティーやポジティブな意見をうまく掘り起こしている。アメリカの国立公園管理の真髄ともいえる取り組み。よりよい事業評価のための積極的な情報提供が行われている。

ヨセミテ国立公園の総合管理計画

アメリカの国立公園には、それぞれの公園の管理方針などを定めた総合管理計画（General Management Plan：GMP）という計画書がある。公園の特性や利用者数など具体的な数値を元に、長期的な観点から取りまとめている。

（困み）方針実現のための5つの目標

ヨセミテ国立公園へ！ [5]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080110-5.html>

適正なビジター利用（Visitor Use）レベル

GMP に記載されている適正なビジター利用（Visitor Use）レベルが具体的な数値で記述されている。結論はどうあれ、政策決定の裏付けデータがしっかりと計画書に書き込まれていることはすばらしいことだろう。

（困み）ヨセミテバレープラン（2000年）概要

User Capacity Management Program（利用者容量管理プログラム）

訪問客数の上限を設定して制限するのではなく、むしろ公園の自然環境に影響のない方法で利用者を受け入れ、さらに満足度も向上させることを主な目的としている。客観的な計測が難しい自然のキャリングキャパシティを測るのではなく、施設容量と利用客の満足度を計測するという逆転の発想。

VERP（利用者経験および資源保護プログラム）

利用者容量を明らかにするために国立公園局が開発したのが、「Visitor Experience and Resource Protection（利用者経験および資源保護プログラム）」、通称 VERP（ヴァープ）。バックカントリーのように自然環境の保全が優先される地域とは異なり、ヨセミテバレーのような観光目的の利用者が多いフロントカントリーでは、それまでの経験則やモニタリング調査の結果をもとにした情報の提供と利用の誘導によって、利用者のピークを分散させるといった社会科学的な対策が奏効するという考え方に立脚。人間の心理的な許容量と自然の収容力の間には多少のギャップがあることが VERP の成立する大前提。

そのギャップを明らかにするために利用者を対象とした聞き取り調査を実施。その結果、主要な展望台などでは、他の利用客が全くいないよりは適度に混んでいる方が利用客は安心できることが明らかになった。観光要素の強い施設においては、混雑が居心地の悪さを強いる反面、極端に人が少ない状況もさびしさを呼び起こす。逆に、もっともス

トレスを感じるのは、駐車場が満車で待たなければならないこと。つまり、駐車場の混雑状況の把握と適切な誘導が利用者の満足度向上のカギとなる。

(参考) VERP の作業手順

ヨセミテ国立公園へ！ [6]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080110-6.html>

ヨセミテとセコイア・キングスキャニオンの違い

ヨセミテ国立公園は、サンフランシスコという巨大都市から近く、利水や電力などに対する需要を背景とする、強大な政治的圧力に常にさらされてきた歴史をもつ。それに対しキングスキャニオン国立公園では、ダム建設の計画が持ち上がったものの中断に追い込まれ、実際に公園を訪れてみても、ヨセミテ国立公園の大規模な周回道路のようなものはない。さらに、キングスキャニオンは、先進的なバックカントリーの管理計画を立案してきたことでも知られるなど、両者は公園管理の性格が大きく異なる。

アメリカの国立公園管理の歴史 ——1960年代という時代——

シエラネバダ山脈に位置するこのヨセミテとセコイア・キングスキャニオンという2つの自然地域を舞台に、保護と利用や開発をめぐる様々な政治的抗争が繰り返されてきた。その抜き差しならない対立を経て、アメリカが世界に誇る「国立公園」という制度が実現した。その制度は完璧なものではないかもしれないが、こうしたさまざまな関係者の努力の歴史に触れるとき、アメリカの生み出した「国立公園」という制度は、国立公園の守る景観と同様にすばらしいものだと実感する。

(1916年の国立公園局設立から1970年の環境保全運動にかけての国立公園における自然管理や施設整備政策の変遷を紹介。)

妻の一言：レッドウッド国立州立公園は1日10時間労働の4日勤務（週休3日制）。1～2日の休暇を追加すれば、ちょっとした遠征も可能になる。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 15 話）「国立公園局と州政府の協力」

2008. 03. 06

国立公園局と州政府の協力[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080306-1.html>

石原都知事（当時）訪米のうわさ。関心のひとつが連邦政府と州政府との協力体制にあることから、日本ではほぼ無名のレッドウッドが候補に。確かにこの公園は米国唯一の「国立州立公園」だ。その管理にはおもしろい工夫がいろいろある。

バイタルサインモニタリング

海域生態系のモニタリング計画策定のためのスコーピング会合（予備検討会議）が開催された。会合には、学識研究者、国立公園局の各担当部局、太平洋沿岸の国立公園ユニットの職員など 50 名以上が参加。「バイタルサインモニタリング」とは、すべての環境要素をモニタリングするのではなく、とにかく真っ先に変化の兆候が現れる指標種に的を絞ってモニタリングを行うこと。これにより少ない負担で効果的に生態系変化の兆候を把握することができる。特にモニタリングに費用と時間を要する海域にはこの効果が大きい。

外来生物対策

スコッチブルーム、イングリッシュアイビー（いずれも欧州から輸入された園芸種）の駆除計画策定のための分布調査。ここでも GIS が活躍している。

国立公園局と州政府の協力[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080306-2.html>

都知事来訪決定と資料準備

都知事訪問に向けて資料集を用意する。買い物以外は土日ボランティアハウスにこもりきりでの作業。

国立公園の職員と組織

資料作りの作業から浮かび上がってきたのは、国立公園システムの発達と職員の分業制が切っても切り離せないこと。国立公園局には 16 の職種（carrier field）があり、それぞれ専門的な教育が行われている。

【表 1】国立公園局職員の職種 (Career Fields) 一覧

国立公園局関係の職員教育には研修制度が重要。国立公園局には、外部の研修施設も含め、11 の研修施設がある。

【表 2】国立公園局関係の研修施設等（11 箇所）

国立公園局と州政府の協力[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080306-3.html>

レストラン巡り

グルメの石原知事訪問に向け、お薦めの店をいくつか準備しておく必要がある。「このあたりで一番美味しいお店はどこですか？」いろいろな人に聞いて回ったが、それぞれ言うことが違う。結果、片っ端からめぼしいレストランをめぐることになった。

国立州立公園の成立経緯

国と州政府との連携の経緯。まだまだ新しい取り組みだ。

国立州立公園の共同管理

『国立州立公園』といっても、組織や予算は完全に独立。予算については、相互に融通することができる。カリフォルニア州政府が7月1日から新予算年度となるのに対し、連邦政府は10月1日から予算が切り替わるため、この予算融通の威力は大きい。州立公園の所長は、国立公園局の本部に連絡員として勤務している。

収益施設は州立公園に、教育施設は国立公園に設置するという分業もポイント。

国立公園局と州政府の協力[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080306-4.html>

公園の独自財源、ビジターセンターなどでの収益

レッドウッドではRNHAというNGOが協力団体としてビジターセンターで物販を行う。州立公園にも同様の協力団体があるが、収入はそれほど多くない。

(参考) 協力団体について

国立公園局本局の協力団体である国立公園基金は、過去7年間で1億3,700万ドル(約150億7千万円)相当、その他の協力団体(個別の公園ごとの協力団体など)が、年間合計5千万ドル(約55億円)相当の寄付を行っている。協力団体に関する規定などを紹介。

寄付の取り扱い

国立公園における寄付金について。2004年当時、国立公園局全体で年間5千万ドル(約55億円)相当が寄付された。フレンズグループの役割。寄付に関する規定など。

その他の収益(有料施設、コンセッショナー)

国立公園内の、ユースホステルは、コンセッショナーと呼ばれる公園内営業権所有者が借用し運営。たとえ赤字で寄付収入がなくとも、建築物の維持など国立公園側はさまざまな利益を得ている。

(参考) 国立公園局全体の営業権所有者(コンセッショナー)からの収入は、2002年度で3,900万ドル(約43億円)。

公園内での取締り

国立公園と州立公園の連携の最大のメリットは取り締まりの相互乗り入れだった。それまで、それぞれの公園区域から外に逃げられてしまうと逮捕できなかった。

妻の一言：豆腐作りと「トウフバーガー」

アメリカ横断ボランティア紀行（第16話）「レッドウッドの見どころ」

2008.04.24

レッドウッドの見どころ[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080424-1.html>

レッドウッド国立公園詳細地図

http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080424_map.html

（この回からオリジナル地図が登場。）

石原都知事到着

ユーレカには、レッドウッドで作られたカーソンマンションなど、ビクトリア調の建物が今でも残る。レッドウッドの伐採とともに出現し、原生林が100年ほどで切り尽くされてしまうと、この町の時間もそこで止まってしまった。

石原知事によると、「あと70年で人類が『絶滅』する確率は50%」。その真偽はおいておいても、この化石燃料頼みの暮らしはさすがに長続きしないだろう。今のアメリカ人の生活があと何十年も続けられるとは思えない。それにしても、70年という時間は、レッドウッドの大木の平均的な寿命である1,000年に比べて、いかにも短い。

レッドウッド国立州立公園ご視察

ウルフクリークの野外学校（outdoor school）訪問。

プレーリークリーク・レッドウッズ州立公園

公園を縦断するレッドウッドハイウェイと、公園の中ほどを二分するクラマス川。

レッドウッドの見どころ[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080424-2.html>

海沿いの原生林

デルノルテコースト・レッドウッズ州立公園では、レッドウッドの原生林としては珍しい斜面林をみることができる。斜面林の木材は経済価値が高くほとんどが伐採されてしまっている。急峻な地形が、この森林の伐採を阻んだのだ。レッドウッド国立公園は、レッドウッドクリーク（川）の集水域全体の保護を目標として公園区域が設定された。しかしながら、国立公園として指定された時には、区域内の斜面林の多くは伐採されてしまっていた。国立公園局はあえて伐採跡地を国立公園に取り込み、流域のレストレーションに取り組むことになった。これはアメリカの国立公園の歴史上、画期的なこと。また、上流部は民有地が95%を占めているが、この地域における浸食防止対策を行う権利と予算が認められている。国立公園区域外も含めた生態系管理が実施されていることも異例。

ジェデダイアスミス・レッドウッズ州立公園

迫力のある低地原生林の風景。米国でも数少ないダムのない川、スミス川が流れる。水は透明で青く、サケやマスが遡上していく様子が肉眼でも見える。もちろん人工ふ化ではなくまったくの天然ものだ。

石原都知事は伊勢神宮の森とレッドウッドを比較する。

現在も続く大規模な皆伐。アメリカの森林施業は日本のそれと全く異なる。持続可能性や生態系影響など考慮されない北米材生産現場の現実。安い輸入材の生産は地域の流域生態系の破壊などの深刻な代償を地域に残している。日本の持続可能な林業の知恵は本当に貴重だ。

レッドウッドの見どころ[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080424-3.html>

新聞報道

地元紙一面に石原都知事と私たちの写真が掲載。

グローブ

レッドウッドの森のすばらしい原生林。おそらくアメリカの国立公園の中でも有数の原生林だ。プレイリークリークから太平洋岸のゴールドブラフビーチに至る「マイナーリッジトレイル」や「ジェームスアービントレイル」を歩くと、その雰囲気を楽しめることができる。

クラマスオーバールック

クラマスオーバールック（展望台）は、クラマス川の河口の高い崖の上にある展望地点。クラマス川は水量が多く豊かな大河川で、河口には、トドやアザラシ、そしてクジラがエサを食べにやってくる。絶好の野生生物観察地点。双眼鏡をお忘れなく。

妻の一言：セントパトリックス州立公園

メノウ拾い。国立公園に比べ気楽な州立公園、地域住民の人気スポット。アメリカの自然公園はそれぞれに人を引き付ける魅力がある。

アメリカ横断ボランティア紀行（第17話）「オレゴン州、ワシントン州遠征」

2008.06.19

オレゴン州、ワシントン州遠征[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080619-1.html>

ワシントン州、オレゴン州保護区調査

オレゴン州及びワシントン州に“遠征”。オレゴン州ポートランドにある魚類野生生物局地域事務所の他、ワシントン州にあるニスクアリー国立野生生物保護区（Nisqually National Wildlife Refuge）及びマウントレニーエ国立公園（Mount Rainier National Park）を訪問。

（地図）ワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州北部レッドウッド周辺地図

魚類野生生物局は、全米を7つの地域に分け、各地域に地域事務所を置いている。今回訪問したポートランドにある地域事務所は「リージョン1地域」を担当しており、ワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州、ネバダ州、アイダホ州そしてハワイ州を管轄している。

（参考）魚類野生生物局地域事務所管轄地域境界図

今後の保護区管理の課題と方向性

北部太平洋岸及び太平洋諸島エコリージョン担当のフォレスト・キャメロン野生生物保護区監督官インタビュー。保護区管理の2つの課題；職員の変質と外来種問題。

ボランティアの貢献

野生生物保護区におけるボランティアの貢献は大きく、リージョン1管内では、職員数に換算して全体の約2割をボランティアが占める。

ニスクアリー国立野生生物保護区

魚類野生生物局の保護区の管理方針は、野生生物の生息地を保護すること。国立公園局の“利用者優先（People first）”の姿勢とは大きく異なる。

オレゴン州、ワシントン州遠征[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080619-2.html>

ニスクアリーNWRの管理体制

保護区の職員は9名の常勤正規職員（permanent staff）、2名の常勤臨時職員（temporary full time staff）、その他契約職員（contract staff）1名の合計12名。それを補うのが、国の奨学金制度であるAmericorpの奨学生5名とボランティア約100名。課題はボランティア用の宿舎がないこと。

職員の待遇

国立公園局に比べて、単位保護区面積当たりの予算や職員数が少ないために、ひとつの仕事に複数の職員が関わるのが難しい。一か所での任期も伸びる傾向にある。

ニスクアリー国立野生生物保護区の管理方針

野生生物保護区の管理は、保護区ごとに定められる包括保全計画（Comprehensive Conservation Plan : CCP）に基づく。

保護区の管理業務

毎年春、2～2ヵ月半に相当する時間を、外来種対策に費やす。毎年4,000～5,000個体のカナダガン（Canada Geese）が渡来、湿原の水位調整や草地の管理、ムギなど渡り鳥が食べられるような植物を播種する。

フレンズグループ（Friends of Nisqually National Wildlife Refuge）はビジターセンターで物販を行い、売上の一部を現金や図書などの形で保護区に還元する。

河川流域での協力

流域の一体的な管理を目的に、流域沿いの自治体、原住民団体、州政府、国の機関などにより「ニスクアリー川協議会」が設立されている。

マウントレーニエ国立公園

マウントレーニエ国立公園は、環太平洋火山帯に位置する火山である標高4,392mのレーニエ山を含む面積23.6万エーカー（約9.5万ヘクタール）と、その山麓の森林地帯からなる国立公園。1899年に米国で5番目の国立公園として設立された。

国立公園の抱える問題

大都市からの汚染物質排出による酸性雨、酸性霧、オゾン、霞などの影響が深刻。また、登山客などが排泄する「し尿」の影響が懸念されている。また、利用者による踏み荒らしによる植生荒廃も進行。

（写真）アスファルトで舗装された登山歩道、ごみの分別

国立公園内の施設

巨大なビジターセンターと昔ながらの施設の比較。巨大施設は建て替えにより効率的な施設に更新される。

国立公園施設の二つの大きな類型

「ミッション66」とCCCによって整備された施設の比較。国立公園局は、古い施設を「アダプティブ・ユース（adaptive use）」として、積極的に保全・利用。施設整備は現代の省エネ設計を導入し、新たな局面へ。

（「妻の一言」をお休みしたところ、アンケートに思わぬ反響が寄せられた。）

アメリカ横断ボランティア紀行（第 18 話）「イエローストーン国立公園」

2008. 08. 28

イエローストーン国立公園[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080828-1.html>

（地図）イエローストーン国立公園位置図、拡大イエローストーン地域地図

イエローストーン国立公園

1995 年～1996 年にかけて、カナダから 31 頭のオオカミが再導入された。

（地図）イエローストーン国立公園区域図

国立公園の施設計画

公園内には、大きな 8 の字状の周回ループ道路が整備され、周回道路に沿って、「ピレッジ」と呼ばれる利用拠点が設けられている。公園のエントランスは 5 箇所しかない。広大な公園面積に比べてゲートが少なく、アクセスコントロールや料金徴収のコスト削減の効果が高い。トップシーズンというのに、いったん国立公園に入ってしまうと、それほど混雑を感じない。地理的条件から、どうしても利用者が一箇所に集中してしまうヨセミテやグランドキャニオンとは印象が異なる。

（囲み）グランドティートン国立公園（Grand Teton National Park）、ジョン D. ロックフェラージュニア記念パークウェイ（John D. Rockefeller Jr. Memorial Parkway）

公園管理に関する課題

イエローストーン国立公園は、世界最初の国立公園であり、さまざまな管理上の問題にも真っ先に直面してきた。例えば、オオカミの駆除、クマの餌付け、森林火災の管理方法など。軍隊による管理、1988 年の大規模な森林火災。エローストーン国立公園は、自然地域におけるマスツーリズムの先駆けとなった地でもある。

「アラスカ州のデナリ国立公園は、イエローストーンをはじめとする古い大公園の失敗に学んだからこそ、自家用車の締め出しに成功することができた。デナリの管理手法は参考になるはず」この公園職員の一言がアラスカ行きのきっかけに。

イエローストーン国立公園[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080828-2.html>

スノーモービル規制

冬季のスノーモービルの乗入れ問題。クリントン政権時代に全面的な締め出しを打ち出したものの、ブッシュ政権に代わって見直されるなど混迷、国民の注目を集めていた。

冬季利用規制の経緯

補助的環境影響報告書（SEIS）に基づく規制の内容

○規制のパッケージの内容

○冬季利用の目標

1日当たりの台数制限

スノーモービルの規制台数の算定方法を紹介。

イエローストーン国立公園 [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080828-3.html>

最適技術基準（BAT）の適用

BATは、乗り入れるスノーモービルについて、「現時点でもっとも静かできれいなものであること」を求めるもの。業界が受け入れ可能な解決策。

順応的管理

影響の有無を監視しながら、影響があれば利用を中止するなどの必要な対策をとる。数値の設定自体は機械的であるが、それを補完できる仕組みがある。

○順応的管理の具体的な内容

ガイド制度の導入

規制の段階的導入

規制は、2度の冬季シーズンに渡って段階的に適用され、3年目に必要な変更を行う「段階的導入」の手法を採用。地元業者への影響に配慮したもの。

なお、国立公園局の憲法ともいえる「管理政策書（Management Policy）」が2006年に改定された。政権の交代とともに行われた大きな政策の変更。

イエローストーン国立公園 [4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu080828-4.html>

最終規則の決定

様々な検討の結果、最終規則が決定され規制が納入されることに。

（写真）

- ・軍隊による国立公園の管理（初期の頃の写真）
- ・初期の利用者
- ・初期の自動車利用の様子

妻の一言：イエローストーン国立公園

イエローストーン国立公園で出会ういろいろな野生生物と、それが引き起こす交通渋滞。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 19 話）「アラスカへ（その 1）」

2008. 12. 11

アラスカへ（その 1） [1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu081211-1.html>

アラスカ州保護区調査

（地図）

米国本土からアラスカへの主な航路、アラスカの保護区位置図、キーナイ半島及びその周辺図

ホーマーへ

最初の目的地は、アンカレッジのすぐ南にあるキーナイ半島。ホーマーからは氷河も見える。ハクトウワシも多数生息。

アラスカ・マリタイム国立野生生物保護区

保護区の事務所は、アラスカ島嶼・海洋ビジターセンター（Alaska Islands and Ocean Visitor Center）が併設された、かなり大規模な建物の中にある。

（困み）アラスカ・マリタイム国立野生生物保護区（Alaska Maritime National Wildlife Refuge）

「日米渡り鳥保護条約」に基づく日米の協力。

（地図）アラスカと日本の位置関係

アリューシャン列島における外来哺乳類の侵入問題。

アラスカへ（その 1） [2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu081211-2.html>

キツネの駆除対策。アホウドリの保護のための FWS と漁業関係者の妥協点。保護政策の進展は、「それぞれが自分の組織の中だけに閉じこもるのではなく、どうやって両者が合意できるかを考えるようになった」ことがきっかけに。

野生生物保護区の職員

この保護区に勤務する生物学者は、最短でも 8 年程度勤務し、15 年間以上勤務している職員も少なくない。

モニタリングの目的とボランティアの貢献

1975 年より行われている保護区内の鳥類の繁殖状況に関するモニタリング結果は、毎年” Breeding status, Population Trends and Diets of Seabirds in Alaska” として取りまとめられている。調査結果から、地球規模の海洋環境変化の理解につながるようなデータが得られている。

一方、この保護区には常勤職員が25名のみ。保護区の面積からすると驚くほど少ない。研修生とボランティアは生物部門だけで70名が勤務。その他、ビジターセンターにも20名程度の研修生とボランティアが働いている。ボランティアの力がここでも活躍している。

キーナイ国立野生生物保護区

(囲み) キーナイ国立野生生物保護区 (Kenai National Wildlife Refuge)

アラスカへ (その1) [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu081211-3.html>

スワード到着

キーナイフィヨルド国立公園のビジターセンター訪問。

(囲みと地図) キーナイフィヨルド国立公園 (Kenai Fjords National Park)

エグジット氷河

唯一陸路で訪問できる公園区域。エグジット氷河 (Exit Glacier) を歩く。

氷河クルーズ

ラッコ、パフィン、トド、氷河など、見どころたくさんツアー。

クジラ出現

国立公園らしからぬ「海のサファリパーク」ツアー。

ホルゲート氷河

氷河が直接海に崩れ落ちるところが見られるスポット。

港にて

今日のクルーズといい、この釣り船といい、ここの人たちは自然を「人寄せ」とか「金儲けのネタ」としか考えていないのではないかと。日本に輸入されている海産物の多くは、アラスカで非持続可能な方法で獲られたものかもしれない。回転寿司とか、世界各地から輸入されている、やけに安い天然ものの「オヒョウ」や「キンメダイ」、「カサゴ」の仲間に、私たちの食生活は支えられている。

この日のクルーズも夕食もすばらしいものだったが、同時にいろいろなことを考えさせられる1日となった。

妻の一言：スワードの「アラスカシーライフセンター」訪問。この施設は1989年に発生したエクソン・バルディーズ号の石油流出事故を契機に設立された。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 20 話）「アラスカへ（その 2）」

2009. 03. 18

アラスカへ（その 2） [1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090318-1.html>

魚類野生生物局リージョン 7 事務所訪問

魚類野生生物局のリージョン 7 事務所と日本の環境省との関係は深い。アラスカと日本を行き来する渡り鳥の保護のための連携。

また、リージョン 7 事務所は米国地質学調査所（United States Geological Survey: USGS）のアラスカ生物学センター（Alaska Biological Center）とも密接に連携。

（地図）アンカレッジ地図、FWS 事務所位置図

アラスカにおける国際協力

アラスカはロシアと隣接するだけでなく、東アジアや南アメリカなどの国々との間を渡り鳥が往き来している。渡りルートを共有するロシア、アジア、オーストラリアなどの太平洋諸国、ユーラシア大陸諸国、北極圏諸国などの国々との関係が重要。

アラスカへ（その 2） [2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090318-2.html>

国立公園局アラスカ地域事務所

国立公園局の予算は、基本的に公園の利用者数に基づいて配分される。アラスカ地域は自然が豊かなのに予算は他の地域よりずっと少ない。

（困み）参考 1: クロンダイクゴールドラッシュ国立歴史公園（Klondike Gold Rush National Historic Park）

アラスカ地域における国立公園の取り組みと課題

ベリングシア国際遺産公園（Beringia International Heritage Park）構想は、ベーリング海峡をはさんで隣接するロシア側と米国側の国立公園を包括的に国際公園化する取り組み。

アラスカへ（その 2） [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090318-3.html>

パブリックランドインフォメーションセンター

パブリックランドインフォメーションセンターは、ANILCA 法（アラスカ重要国有地保全法（Alaska National Interest Land Conservation Act of 1980））を契機として設立された。法律は、アラスカの土地の所有や管理主体を定め、結果

として、合計1億430万エーカー（約4,220万ヘクタール）にも上る国立公園や保護区が誕生した。アラスカの自然環境の保全上、もっとも画期的な法律のひとつ。

アンカレッジ歴史芸術博物館

アラスカの歴史、文化、産業などに関する具体的なデータが展示されており、情報の宝庫。日本語で書かれたアラスカの歴史資料も配布されていて、これも大変貴重な資料になった（文末の参考3）。

【表1】アラスカの経済活動（博物館の展示から転載）

アラスカの経済活動のうち観光は2%に過ぎず、36%は石油ガスが占める。

【表2】アラスカの土地所有（博物館の展示から転載）

アメリカでは展示パネルが何よりの情報源。

アラスカへ（その2）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090318-4.html>

1970年代のアラスカにおける保護区設立の攻防

1971年にアラスカ原住民法（Alaska Native Claims Settlement Act: ANCSA）が成立した。この法律により、原住民の主張していた権利が認められ、原住民の団体に対し、4,400万エーカー（約1,780万ヘクタール）の土地と9億6,250万ドルの資金が提供される。カーター大統領は、1978年に遺物保存法（Antiquities Act of 1906）に基づいて総面積22万平方キロメートルにおよぶ17の国立記念物公園を設立。続いてカーター大統領は、ANILCA法を1980年12月2日に制定、4,700万エーカー（約1,900万ヘクタール）の国立公園、国立記念物及び国立保護区、5,380万エーカー（約2,180万ヘクタール）の野生生物保護区、そして350万エーカー（約140万ヘクタール）のレクリエーションエリアと原生河川回廊（コリドー）が新設もしくは拡張された。ANILCAによってアラスカの国有地の保護が大きな前進を遂げた一方、同法は、新設された保護区の区域内において、原住民による「伝統的に行われてきた行為（subsistence）」（生活のための狩猟行為等）を容認。また、北極国立野生生物区域（Arctic National Wildlife Range）では、拡張区域に石油の埋蔵区域が含まれ、その開発の可否はあいまいなままとされた。

参考3:アラスカ年表（アンカレッジ歴史・美術館「アラスカ展示室資料」などを基に作成）

妻のひとつこと：アラスカ旅行の留意点。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 21 話）「アラスカへ（その 3）」

2009.06.11

アラスカへ（その 3） [1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090611-1.html>

デナリ国立公園へ

（地図）デナリ国立公園位置図、区域図

アラスカへ（その 3） [2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090611-2.html>

国立公園事務所インタビュー

（参考）デナリ国立公園及び保護区

1978 年に採用され、それ以降ずっとこの公園で資源管理部門に勤務しているベテラン生物学者のジョーさん。

自動車メーカーは、高価で収益性の高い SUV 車（sports utility vehicle: 日本の RV 車に相当）を売りたい。このようなオフロード車が売れるには、それを使うのにふさわしい「フィールド」や「目的地」が必要だ。国立公園内には車道も駐車場もしっかりと整備されている。すばらしい自然景観の中を快適にドライブすることもできるし、未舗装路を通して自然の核心地域に踏み込むこともできる。国立公園に置かれているパンフレットなど気をつけてみると、自動車メーカーの広告が多いことがわかる。

「国立公園局は予算不足を補うために、私企業から寄付を受けている。私企業だから、当然相応の見返りを期待している」自動車利用が、アメリカの国立公園を魅力的なものとしている一方で、多くの課題も生んでいる。

国立公園の直面する課題

「この国立公園の将来は、動力付き移動手段（motorized vehicle）の使用問題の解決にかかっている」いわゆるスノーモービルや小型のプロペラ機などの問題。気候変動の影響も顕在化している。

「この国立公園の資源は、確実に変化してきている」

ANILCA 法の抱える問題

新たに拡張された国立公園部分は、原住民による生活のための狩猟採取行為（subsistence activities）が認められている。さらに、新たに追加された保護区（preserve）部分では、レクリエーション目的の狩猟（sports hunting）も認められている。

車道規制

「1972 年に導入されたシャトルバスサービスと、それに伴う自家用車乗り入れ規制は、利用者規制の成功事例といえる」

1970年代にジョージパークス・ハイウェイが舗装されるまで、アラスカ鉄道（1920年代に完成）が、デナリ国立公園にとって唯一の主要なアクセス手段だった。

「ハイウェイが舗装される時期を逃さず、公園の中心部へのアクセスをシャトルバスかツアーバスに限定した。この判断は、アラスカを除く米国の大陸48州の各国立公園で繰り返されてきた失敗から教訓を得たものだ」

新たなアクセス計画

現在も問題になっているのが、いわゆる「ノースアクセスルート問題（North Access Route Issues）」、公園の北側に公園の入口を新設し、別のルートで公園の核心部分に到達するルートを開こうとする案だ。国立公園は今でも過酷な政治的圧力に直面している。これは民主主義国家の宿命でもある。

参考：デナリ国立公園関係年表（ノースアクセスルート関係）

アラスカへ（その3）[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090611-3.html>

バックカントリー管理計画

デナリ国立公園の利用レベルの設定は、VERPに基づいて設定されている。

解説：VERPとは

策定中のバックカントリー管理計画案で用いられている経験の質の指標

- ・ Solitude（独居感）：到達可能で、頻繁に利用されている地域ながらも、自然景観が維持されていて、人工物はほとんど目に入らない。利用者は、最盛期を除くと、通常は1日10組を超える他の利用者とは遭遇しない。
- ・ Primitive（原生的）：ほとんど利用者がなく、あたかもまだ新たな発見があるかのように感じられる地域。1日に遭遇する他の利用者はおよそ2組までで、アクセスポイント以外では自然資源への影響がほとんど見られない。
- ・ Natural（自然）：ほとんど踏査されていないように見え、利用者はこれまで誰も訪れたことのない原生自然に入り込むかのような印象を受ける。他の利用者との遭遇は、一週間に3組以内。

サウントスケープ

バックカントリー利用者から寄せられる苦情でもっとも多いものは機械的な騒音。ヘリコプターや航空機の騒音が公園の質を大幅に損なっている。

地域住民と国立公園

「アラスカでは、産業としての観光業が受け入れられにくい土壌があって、ある程度の規制もやむを得ないと考える人が多い」規制的な措置が受け入れられやすい素地がある。それでも政治的な圧力も大きい。

「影響力を持つのは、やはりワシントンDCの政治と、その背景にある利権や開発への圧力」。また、「アラスカの人々の間には『利用を制限しなくても国立公園は保全できる』という幻想がまだまだ根強い」

自然環境が豊かなだけに、逆に理解が得られ難いというジレンマ。自然を守る国立公園が、「フロンティアの幻想」を守り育ててしまった。国立公園の功罪。実際には、アラスカでもすでにフロンティアは消滅してしまっている。

アラスカへ（その3）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090611-4.html>

利用規制（アクセスコントロール）の考え方

「簡単に言えば、アクセスコントロールとは『あなた方は行けるけど、あなた方は行けませんよ』ことを選別し伝えること」

「大切なことは、国立公園が人々の期待を裏切らないこと。つまり、『制限があって今は行けなくても、いつか行くことができる』、『国立公園は、そのゲートを閉ざしてしまふことはない』という信頼を得ること」

「規制する以前に、まず社会全体が、『国立公園』というものに誇りを感じ、それが貴重なものであると理解してもらうことが大切。アメリカでは、国立公園や原生的な自然の重要性に対する基本的な理解がある。また、それを育てていくことこそが国立公園の役割でもある」

「私たち資源管理部門の仕事は、現地に出て、公園内にどのような資源があるかを記録すること。私たちが収集・整理したデータを、自然解説（インタープリテーション）部門がわかりやすく人々に伝えていくという地道な積み重ねが、人々の信頼を得るためには必要なこと」

ジョーさんのインタビューの中で印象的だった一言。

「People believe in parks as a society」——「人々は、社会的な合意として、国立公園を信頼してくれている」それが規制の基本。

「規制」と社会的な「信頼」は表裏一体なのだ。

70年代という時代（アメリカ国立公園拡充の時代）

アメリカの国立公園にとって、ANILCA法の成立する1980年までを含む1970年代は、国立公園システムに膨大な区域が追加された「拡充の時代」

1970年に一般権限法（General Authorities Act）を制定した。これにより、「国立公園局が管理する公園は、ひとつの『国立公園システム』を構成する同等の国立公園ユニットであること」が明確になった。1972年、ニューヨークとサンフランシスコという2つの大都市に、国立レクリエーション地域が設立され、現在の国立公園システムの基礎ができあがった。

1970年代は環境保全運動の大きな盛り上がりを背景に、国立公園をはじめとする保護区の面積が拡大し、生態系や種の保存といった新たな命題が国立公園に課されはじめた、大きな時代の転換点。アラスカにおける国立公園の大幅な拡充やレッドウッドの拡張などは、その象徴的なできごと。

アラスカへ（その3）[5]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090611-5.html>

バスツアー

片道85マイル（約140キロメートル）、約11時間のバスツアーに参加。

アイルソンビジターセンター

簡素なトイレが併設されているが、売店もなく、バックカントリーらしい最小限の施設。

アラスカへ（その3） [6]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090611-6.html>

妻の一言：デナリの B&B、国立公園内のタイガトレイルとドッグケンネル。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 22 話）「アラスカへ（その 4）」

2009. 08. 25

アラスカへ（その 4） [1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090825-1.html>

チナ川州立レクリエーションエリア

（囲み）チナ川アラスカ州立レクリエーションエリア（Chena River State Recreation Area）

（地図）位置図と区域図

自然公園のトイレ

典型的な便槽式トイレ。水と電気はないが、室内は広く清潔でトイレトペーパーもある。建物の後ろに設置された大きな黒いパイプがにおいを効率的に排出してくれる。

ムースとの出会い —その 2—

至近距離でムースの親子と遭遇、大きくてまるで恐竜のようだ。

ユーコン・フラット国立野生生物保護区

（地図）フェアバンクス市街地 地図

ユーコン・フラット国立野生生物保護区の管理事務所を訪問。ユーコン川の上流部に広がる野生生物保護区。原住民との調整が課題。職員は常勤職員が 13～14 名、臨時職員（seasonal）が 6 名程度。事務所には、航空機が 2 機（プロペラ 4 人乗り、6 人乗り）ある。

（囲み）ユーコン・フラット国立野生生物保護区（Yukon Flats National Wildlife Refuge）

利用者の管理

保護区の利用は比較的自由。利用者数は少なく影響は少ない。モニタリングも、河川 1 本をボートで流下しながら、焚き火跡、キャンプ跡、上空を横切った航空機の数などを記録する。うらやましい調査だ。

アラスカへ（その 4） [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090825-3.html>

保護区管理の課題

森林の伐採、ATV（All-terrain vehicle：レクリエーション用小型四輪駆動車）、トラクターの使用などが増加。

北極国立野生生物保護区事務所訪問

（囲み）北極国立野生生物保護区（Arctic National Wildlife Refuge）

業務の範囲や調査件数だけでもものすごい量だ。

【表 1】北極国立野生生物保護区事務所における主な業務

【表 2】主なモニタリング、調査事業

保護区における石油開発

(地図) パイプラインルート図

この野生生物保護区内のもっとも大きな問題は石油開発問題だ。現在も保護区内で石油開発目的の探査が行われている。石油開発がウィルダネスや保護区の価値を損なうことは明白だが、ブッシュ政権（当時）の圧力もある。

「保護区は、影響を裏付ける科学的データを蓄積していくしかない」

気候変動の影響に関する膨大な情報はウェブサイトには掲載されていなかったが、現場では科学的な観点からの客観的な調査とデータの集積が進んでいる。

アラスカへ（その 4）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu090825-4.html>

アラスカの国立公園と野生生物保護区

【表 3】アラスカにおける国立公園と野生生物保護区（2008 年現在）

陸地面積に対する割合では、国立公園 12.9%、国立野生生物保護区 18.1%、合計 31.0%が保護区に指定されている。

地図：アラスカの国立公園・国立野生生物保護区位置図

アラスカの国立公園ユニット【2】についてみると、アラスカ州内 23 ユニットの面積合計は約 2,200 万ヘクタール。アラスカの陸地面積の約 13%を占め、全米の国立公園システム全体の約 65%に相当する（表 4・表 5 参照）。

国立野生生物保護区 16 箇所では、最大の保護区が北極国立野生生物保護区の約 790 万ヘクタール。日本の国土面積の 5 分の 1 強に相当する面積だ。野生生物保護区の合計面積は約 3,100 万ヘクタールで、これはアラスカの陸地面積の約 18%を占め、全米の国立野生生物保護区の総面積のうち、実に約 8 割を占めることになる（表 6 参照）。

米国は国土が大きいので、面積比では、国立公園、国立野生生物保護区はそれぞれ 3.6%と 4.1%に過ぎない（表 7 参照）。国立公園発祥地の米国には、もっと多くの自然公園がある印象もあるが、アラスカ以外についていえば、その割合は 1%前後（それぞれ 0.9%、1.2%）にまで減少する。

日本の国立公園が国土面積の約 5.5%を占めていることを考えると、制度の違いはあるものの、米国国立公園の国土に占める割合は意外に小さいことがわかる。

一方で、米国の国土面積の約 2 割を占めるアラスカには、米国の保護地域が集中している。ANILCA 法による保護区の指定がいかに意義深いものだったかを改めて実感することができる。米国の国立公園や野生生物保護区の位置づけや規模を考える際には、この“例外的”なアラスカとその他の地域の保護区とを区別して考える必要があるようだ。

アラスカ出発

『Saga of the Bold Land』日本語にすると『手付かずの土地の宿命』という簡素な装丁の図書。購入して読んでみると、これだけアラスカの歴史を克明に記述した資料はなかった。

2週間の滞在の間に、アラスカに対する認識が大きく変わった。「アメリカ最後のフロンティア アラスカ」は確かに自然の宝庫であり、保護地域のスケールも桁違いに大きい。国立公園においても、そうした自然のすばらしさを紹介する展示は非常によくできている。ところが、そのような自然がどのようにして残されてきたか、そして、どのような危機に直面しているか、ということに関する解説はほとんど見当たらない。石油開発に関する権益、原住民の権利、保全運動の高まり、カーター政権の功績、そしてその結果合意された ANILCA 法などに関して、それを総合的にわかりやすく説明しているものはなかった。

また、アラスカの住民の多くは、自然地域の保護より、石油開発やオオカミの個体数調整に興味を持っている。その理由のひとつが、石油産業への依存度の高さだ。石油産業関連の経済活動の割合が36%であるのに対し、観光はたった2%に過ぎない。

【表 8】アラスカの経済活動（博物館の展示から転載）

ブルードーベイの石油が枯渇する時、またはアラスカ湾の巨大ハリバットが釣れなくなる日が到来するのは、意外に近いかもしれない。アラスカの自然保護をめぐる闘いは過去のものではなく、将来も予断を許さない。また、その一端を大量の海産物を輸入する私たち日本人が握っている可能性が高いように思われる。

妻の一言：パイプラインとお掃除屋の「豚」

アメリカ横断ボランティア紀行（第 23 話）「さよならレッドウッド」

2010.01.21

さよならレッドウッド[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100121-1.html>

引越し準備

アラスカの成果を整理するだけで精一杯で、レポートの作成はワシントン DC まで持ち越しとなった。膨大な資料をワシントン DC に送ることになった。

旅の計画

ロッキー山脈をいつ越えるか、どこを越えるか。雪が降る前にロッキーをこえてデンバーに入りたいが、国立公園が集中する有名なグランドサークルも今回が最後の訪問のチャンス。

（地図）

【図 1】 I-80 号線と I-70 号線ルート図（ユタ州内）

【図 2】 ロッキー山脈越えのルートとグランドサークル周辺の国立公園

【図 3】 アメリカ横断ルート（レッドウッド～ワシントン DC）

資源管理部長インタビュー

レッドウッド国立公園の資源管理及び科学部（Division of Resource Management and Science）部長のテリーさんのインタビュー。1980 年から現在に至るまで、24 年間にこのレッドウッド国立州立公園で勤務。レッドウッドの自然と文化の「生き字引」。

保護地域の管理と資源管理の歴史

「米国の保護地域の管理は、まず区域に沿ってフェンスを設置することから始まった。人の立ち入りを制限すれば、公園を守ることができると考えていた。」

こうした国立公園局における保護地域管理の考え方が変化してきたのは、レオポルドレポート（1963 年）が発表されてから。国立公園局の政策の歴史をまとめた著書“Preserving Nature in the National Parks”（『国立公園における自然の保護』）を頂く。研修報告書の柱ともいえる重要な図書となった。

さよならレッドウッド[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100121-2.html>

「1970 年代まで、ほとんどの公園では一般的な業務を行うパークレンジャーが資源管理を兼務していたが、80 年代以降、各公園に資源管理を担う科学の知識を有する職員が雇用され始めた」

レッドウッド国立公園の拡張（1978 年）は、国立公園設置法の改正も含む大きな政策の転換を国立公園システムにもたらした。

もうひとつの戦い

既得権益をもつライフル協会との法廷闘争。保全に狩猟行為が含まれているか否か。この闘争に勝利することにより、ようやく国立公園は、狩猟、伐採などのいわゆる消費的利用 (consumptive use) を国立公園から排除することができた。世界初の国立公園を実現させたアメリカですら、この実現にはレッドウッド原生林の消滅という大きな代償を払わなければならなかった。

政治と国立公園局の資源管理

政治に翻弄される資源管理政策。メディア、自然保護団体、地元選出の政治家の役割。

レッドウッド国立公園における利用者管理

生態系影響を理由にキャンプ場を閉鎖。アメリカの国立公園は、すばらしい景観美と、充実した施設とビジターサービスにより多くのビジターを集めてきたが、レッドウッドは、このような伝統的な国立公園とは一線を画す、新しいタイプの国立公園だ。

資源管理部門のこれから

NEPA をはじめとする環境法規等遵守 (Environmental Compliance) 手続き関係の業務の比重が増す、資源管理・科学部門の専門家。

太平洋・西部地域事務所の取組

『新しいことはいつも太平洋・西部地域事務所から始まる』

この地域では、バイタルモニタリングネットワークを、国立公園のサポート体制の単位としても活用している。上部の地域事務所に頼らず、拠点公園が他の小さい公園を支援する取り組み。

(地図)

【図 4】 国立公園地域事務所管轄地域図

【図 5】 太平洋西部地域ネットワーク区域図

【図 6】 全米バイタルモニタリングネットワーク区域図

【図 7】 クラマス地域ネットワーク内公園地 位置図

さよならレッドウッド[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100121-3.html>

日本の国立公園管理の現場でも、かつて「ブロック制」というものが導入され、国立公園の管理事務所のネットワーク化が行われた。

ウルフクreek野外学校

毎週月火、木金と週に2組のグループを受け入れる。バンガローは5棟あり、40名程度の子どもたちを受け入れるには十分な規模がある。

レッドウッド周辺には、ネイティブアメリカン (インディアン) が多い。

「一般のインディアンは貧しくて、アルコール中毒が蔓延。カジノの経営はコミュニティーの自立を目的としているが、多くの人々はいまだに社会の底辺で貧困に喘いでいる」

伝統的な暮らしを続けるための権利はあるが、現代の教育や福祉、経済的な発展からは完全に取り残されているようだ。こうしたインディアンの子供たちを国立公園が招待する。

「子どもたちはこのプログラムをととても楽しみにしている。国内を旅行することはめったにないし、ましてや国立公園でキャンプをするなんてことはない」

出発

約1時間弱かかるはずの公園縦断もあっという間。昼食を終えて公園区域を出ると、間もなく赤茶けた樹高の低いダグラスモミの二次林地帯に入る。少し内陸に入っただけなのに乾燥し気温も上がってきた。このあたりでは今も伐採が行われている。

さよならレッドウッド[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100121-4.html>

妻の一言：荷物の郵送、不要品バザー、研修報告会。

(囲み)

1. 自然資源チャレンジプログラム

自然資源チャレンジプログラム (Natural Resource Challenge Program) は、国立公園局による自然資源管理に関する大規模な科学・モニタリングプロジェクト。すべての国立公園ユニットに存在する自然資源を回復し維持するために1999年に設立された。

2. バイタルサイン (重要生物指標) モニタリング

公園内の自然資源のモニタリングは、各公園における資源の状況を正確に把握することを目的としているが、すべての資源を監視することは困難。このため、生態系の健全性を示す基本的な指標種として「バイタルサイン (重要生物指標)」を特定し、モニタリングを実施するのが「バイタルサインモニタリング」。

(表1) モニタリング対象として優先度の高いバイタルサインのリスト

(表2) バイタルサインモニタリング ネットワークリスト

アメリカ横断ボランティア紀行（第 24 話）「大陸横断（レッドウッド～フォートコリンズ）」

2010. 04. 08

大陸横断（レッドウッド～フォートコリンズ） [1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100408-1.html>

クレーターレイク国立公園

大陸横断の途中、最初に訪れたのはオレゴン州南部に位置するクレーターレイク国立公園。紺碧の美しい火口湖が印象的。

（困み）クレーターレイク国立公園概要

大陸横断（レッドウッド～フォートコリンズ） [2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100408-2.html>

ラッセン火山国立公園

オレゴン州から一度カリフォルニア州に戻ったところにあるラッセン火山国立公園は、何かさびれたような雰囲気。国立公園としてもイメージの沸きにくい公園。

フィー・プログラムの導入により、国立公園にも貧富の差のようなものが広がっている。人気の高い国立公園でのサービスと施設の過剰整備、利用者数増加への過度のインセンティブ、国立公園管理組織の歪みなどの制度的リスク。入場料金をそのままその公園の管理費に充てること、それもビジターサービス、施設整備、臨時職員の給与のみに限定することの影響は、こうした相対的に魅力の低い有料公園にもっとも大きなしわ寄せがくることを実感。

（困み）ラッセン火山国立公園（Lassen Volcanic National Park）概要

ロッキー越え

グレートベイスンと呼ばれる乾燥地域に入る。西部開拓時代に「死の 40 マイル」と呼ばれた難所で休憩。インターステート 80 号の走行車両は軒並みすごいスピードだ。走行車線は大きなトラックが多く、時速 80～90 マイル（時速 130～140km 程度）は出していないとあおられる。現代においても、ロッキー山脈はおんぼろ車にとって難所。

大陸横断（レッドウッド～フォートコリンズ） [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100408-3.html>

私たちの「幌馬車」は東へ向け走る。途中、ソルトレイクシティーを通過。真っ白な塩類が地表に集積しているのが見える。

大陸分水嶺

大陸分水嶺を通過し、無事ロッキー山脈を越えデンバーへ。翌日、ロッキー山脈国立公園の横断道路が雪に閉ざされ、本格的な冬ごもりに入ったとの報道。間一髪のタイミングでロッキー山脈を越えることができた。

大陸横断（レッドウッド～フォートコリンズ）[4]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100408-4.html>

フォートコリンズでの休憩

たまっていた洗濯、インタビュー、そしてもしかすると入学するかもしれなかったコロラド州立大学の見学。

妻の一言：旅の伴侶（ネズミのチュースケ）

アメリカ横断ボランティア紀行（第 25 話）「大陸横断（フォートコリンズ）」

2010.06.03

大陸横断（フォートコリンズ）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100603-1.html>

国立公園局自然資源プログラムセンター

自然資源プログラムセンター（Natural Resource Program Center）訪問。国立公園局全体の自然資源管理プログラムを支援するために設置され、モニタリング業務などを支援し、全米の調査データを取りまとめてレポートを作成する。

資源管理プログラムの歴史

『パークレンジャー』は、もともとナチュラルリストである公園職員を指していたが、現在は『レンジャー』という取締官を指す。それまで利用に偏重していた国立公園管理について、保護面の充実を図るために導入したのが、「自然資源チャレンジプログラム（Natural Resource Challenge）」。

プログラムセンターの必要性

センターの存在意義は予算配分にある。資源管理予算を通常予算の一部として各公園に配分してしまうと、他の業務予算として回されてしまいかねない。そのため、モニタリング経費はプログラムセンターを通じて直接配分される。モニタリングデータは国立公園局にとって強力な「武器」にもなる。

大陸横断（フォートコリンズ）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100603-2.html>

政策目標の数値化

国立公園局では、政策目標の数値化を「戦略的計画策定（strategic planning）」として取り組む。センターは資源管理に関する政策目標設定のマニュアル作りや支援を行っている。数値目標の魅力と限界。

妻の一言：ロッキー山脈国立公園

アメリカ横断ボランティア紀行（第 26 話）「大陸横断（デンバー）」

2010. 07. 15

大陸横断（デンバー） [1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100715-1.html>

魚類野生生物局第 6 地域事務所

第 6 地域事務所は、モンタナ州、ワイオミング州、ユタ州、コロラド州、ノースダコタ州、サウスダコタ州、ネブラスカ州、カンザス州の 8 州を管轄する。この地域はガンカモ類（Water Fowl）の重要な繁殖地。水鳥の繁殖にとって重要な農地は、買い上げるのではなく『イーズメント』という手法で保全。

【図 1】ウェットランド管理地区 区域図

繁殖可能なガンカモ類のつがいの分布状況。（展示パネル写真）

繁殖環境のモニタリング

ランダムに選ばれたグリッドを 5 月及び 6 月に現地踏査。鳥類を雌雄別に全数カウントし、その結果をノースダコタ州ビスマルクにあるフィールドオフィスで解析。

捕食動物駆除（Predator Control）

ガンカモ類の繁殖率向上のため捕食動物の駆除を実施。

大陸横断（デンバー） [2]

メリーランド州石油流出事故と保全イーズメント

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100715-2.html>

2000 年 4 月発生した石油流出事故の補償によりイーズメントが実施された。補償交渉の過程ではこれまでのモニタリングデータが大きな威力を発揮。イーズメントという制度は、生息地の代償ミティゲーションのツールとしても有効。具体的な対策費用の算出と被害総額との比較が容易。

国立公園局デンバーサービスセンター

デンバーサービスセンター（Denver Service Center: DSC）訪問。国立公園局の事業計画や施設建設計画などを立案するナショナルセンター。施設（facility）部門全国の国立公園ユニット内の施設設計などを行い、計画（planning）部門は各公園ユニット管理の基準となる総合管理計画（General Management Plan: GMP）等の策定を担当し、計画予算を各公園に直接配分。

VERP の背景

VERP は、森林局の LAC（Limit of Acceptable Change）をもとに開発された、自然環境の収容力と利用環境を両立するための計画手法。国立公園における管理オプションは（1）人数制限、（2）行動様式の管理（behavior management）、

(3) 誘導 (distribution management)。VERP はこれらを最適に組み合わせて、利用者にも満足できる範囲で規制を行い、自然を守る。規制の目標像を明確化し共有することを重視。

大陸横断 (デンバー) [3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu100715-3.html>

技術情報センター

サービスセンターの附属施設、「技術情報センター(Technical Information Center: TIC)」には、全米の国立公園に関する計画や図面が一元的に保管されている。巨大な国立公園システムを管理する組織の底力が垣間見える。

妻の一言：デンバー訪問

アメリカ横断ボランティア紀行（第 27 話）「マンモスケイブ再訪」

2010. 10. 07

マンモスケイブ再訪[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu101007-1.html>

デンバー出発

デンバーを出発、ケンタッキー州のマンモスケイブ国立公園を目指す。カンザス州、ミズーリ州、イリノイ州、インディアナ州の各州を東へと横断。

【図 1】横断ルート図（カンザス州～ワシントン DC）

ケンタッキー州到着

道路両脇のオークの森はいかにも晩秋のケンタッキーらしい暗く落ち着いた雰囲気。カントリーロードは石灰岩地方に特有の緩やかなアップダウンを繰り返す。大統領選挙とハロウィーンの光景。

帰ってきた！

マンモスケイブ国立公園再訪。

【図 2】マンモスケイブ国立公園概略図

【図 3】マンモスケイブ国立公園周辺図

マンモスケイブ再訪[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu101007-2.html>

国立公園訪問

マンモスケイブ国立公園の職場再訪。お世話になったブライスさんやリーさんご夫妻と再会。

カブの味噌汁

釣りの師匠、アーバートさん宅訪問。おいしいカブをいただく。

週末の散策

晩秋の国立公園内散策。オジロジカ、グリーン川展望台。

アメリカの大統領選挙

公民館の投票風景。投票者のほとんどは高齢者。早朝から列をなす。

「高齢者の心配の種は頼りない息子のこと。それはまさにブッシュ・ジュニアに重なる。ブッシュへの支持は、そういうだらしのない息子を支えてくれる嫁のローラ夫人と、アメリカの伝統的な母であるバーバラ・ブッシュへの同情票だ」というジョークにもうなずける。

マンモスケイブ再訪[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu101007-3.html>

マンモスケイプの見所

- ・乗馬
- ・カヌー
- (日帰り旅行)
- ・ケンタッキーフライドチキン本社
- ・競馬場
- ・バーボン醸造所
- ・リンカーン記念公園
- ・シボレーコルベットの工場と博物館

妻のひと言：アーミッシュのジャム、リーネルさんとのランチ。ご当地メニューのホットブラウンを食べる。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 28 話）「国立公園『レンジャー養成所』訪問！（その 1）」

2011. 02. 09

国立公園『レンジャー養成所』訪問！（その 1）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110209-1.html>

マザー研修所訪問

マザー研修所 (Stephen T. Mother Training Center) は、国立公園局の中でも最も長い歴史をもつ研修施設。インタープリター（自然解説担当職員）の研修を担当。いわば「レンジャー養成所」だ。国立公園におけるインタープリテーション（自然解説）の基礎となった、フリーマン・ティルデン (Freeman Tilden) 氏の著した『Interpreting Our Heritage』をいただく。国立公園局の教育方針は、大人の世代ではなく感受性の強い子供世代をターゲットにする。

地図：ハーパースフェリー中心部及び周辺図

国立公園局の初任者研修プログラム

国立公園局の初任者研修プログラム『Fundamentals』は 5 つのパートから構成。採用後概ね 2 年以内に受講する。

【参考】「Fundamentals」初任者研修プログラム

初任者研修では、「退職までにどの程度の貯蓄が必要なのか、家をどこに購入しておくべきか、また自分のキャリアの到達点はどのようなポストで、そしてどの職場で退職したいのか、それを実現するために何をすればいいか」ということまでカバーされている。

国立公園『レンジャー養成所』訪問！（その 1）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110209-2.html>

「パークレンジャー」の育成とは

研修の対象は正規職員のみ。増加する非常勤職員は研修の対象にならない。ビジターサービスの質の低下の課題。職員の能力レベルを明確化するため、『コンピテンシー』という概念を導入。

コンピテンシーという考え方

コンピテンシーは、知識 (Knowledge)、技術 (Skill)、能力 (Ability)、態度 (Behavior) の組み合わせ。国立公園局職員の全国的な質 (National Standard) を確立し、維持することを目指す。

自習可能なインタープリター向けのマニュアル「意義のあるインタープリテーション／いかに『心と気持ち』と場所、事物などをつなげるか (Meaningful Interpretation/How to connect hearts and minds to places, objects, and other resources)」。何と田中正造の環境保全活動とその思想が取り上げられている。

研修プログラムの実際

真に求められる職員どうしのパートナーシップとコミュニケーションとは。研修の実際。

妻のひとこと：ハーパースフェリー

アメリカ横断ボランティア紀行（第 29 話）「国立公園『レンジャー養成所』訪問！（その 2）」

2011. 04. 27

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110427.html>

アンティータム国立戦場での研修

（囲み）アンティータム国立戦場（Antietam National Battle Field）

（地図）アンティータム国立戦場周辺図、訪問先周辺図（位置図）

中東での戦闘による殉死者の埋葬を巡る問題をケーススタディーとして検討。マニュアル化することが難しい問題について、対応のための姿勢や原則を学ぶ。現場で出会う多くの難題に対処するためには欠かせない研修。「国立公園は連邦政府の管理下にあるが、国民共通の財産でもある。私たちはその管理を委託されているにすぎない」現場では常に組織として行動し判断できる能力が問われる。

妻のひとこと：アンティータム国立戦場訪問

アメリカ横断ボランティア紀行（第30話）「ハーパースフェリーセンター訪問」

2011.07.26

ハーパースフェリーセンター訪問[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110726-1.html>

国立公園の「メディアセンター」

ハーパースフェリーセンターは、各国立公園のパフレット、インタープリテーションの教材作成、解説板、ビジュアルセンターの展示物などをデザイン、制作している国立公園局のメディアセンター。マザー研修所に隣接している。ロゴマーク、ユニフォームのデザインも担当。

『ユニ・グリッド (Uni-grid) システム』は、国立公園の印刷物の「原理原則」。写真や図面が多く、どうしても不規則になりがちな印刷物のイメージの統一がはじめて可能になった。

ハーパースフェリーセンターの職員

センター職員の多くはエディター（執筆・編集者）やアーティスト。グラフィックデザイナーの仕事を紹介。また、センターが開発した画期的な路傍解説板の秘密とは？

ハーパースフェリー歴史公園内はセンターの実験場。そこで培われた展示物製作技術は全米の国立公園の展示制作にフィードバックされる。

センター所長インタビュー

近年の連邦政府の課題。費用対策効果を評価する得失。センターのような創造性の高い業務と時間コストの効率性を追及する傾向とは相容れない。アメリカの国立公園では入場者数の多寡が公園の魅力の判断基準になることが多いが、公園の管理や効用を「利用者数」といった単一の尺度で測ることは適切ではない。

ハーパースフェリーセンター訪問[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110726-2.html>

国立公園の「国立公園局の組織の歴史的背景」

アメリカの各国立公園の所長は、日本でいう『大名』のようなもの。ワシントンDC本部を嫌い、7つある地域事務所長になることが目標。独立性の強い組織に統一イメージ作り上げるのがハーパースフェリーセンターの役割。

また、民主主義では公園利用者以外の支持がなければ、予算も定員も確保できない。コーポレートイメージを確立し政治的な支持を得るのもセンターの役割。

国を一つにまとめる象徴としての国立公園

国立公園には人々を1つの国にまとめる力がある。黒人などのマイノリティーなども含め、人々を1つにする『包含の精神 (Spirit of Inclusion)』が発揮される。

国立公園のサイン（標識）

アメリカの国立公園の入口標識。記念写真のポイントでもあり、利用者のマインドを変化させるきっかけ。風景はよくないが、必ず十分な駐車スペースがある。国立公園にとって重要な施設のひとつで、イメージ戦略上も重要な役割を果たす。

国立公園における標識整備と CCC

公園施設の基礎は、CCC (Civilian Conservation Corps: 民間人保全部隊) が築いた。CCC は 1933 年にニューディール政策の一環として導入され、「人海戦術」によって整備がすすめられた。その際公園施設のマニュアル(「公園及びレクリエーション施設 (Park and Recreation Structures)」)が整備された(マニュアルから代表的標識の事例)。

急増する自動車利用に手を焼いていた国立公園が状況が伺われる。当時普及しつつあった自動車の受け入れは、国立公園にとっても利用が増えるというメリットがあったが、同時に国立公園での自動車の利用を適切化することが求められた。

例えば、単に近道をするために商業トラックが国立公園内を通行したり、公園に到着したビジターが、それまで走ってきたままのスピードで公園内を疾走したりする問題が起きた。

交通対策としてまず導入されたのが、導入したのがパイロン(石積み塔柱)やゲート(門)。「ここからは国立公園。ゆっくり走りましょう」というメッセージをビジターに伝えることがねらい。

1988 年のサインマニュアル

2003 年に新しいユニガイド基準が策定されるまで使われてきた、標識類のマニュアル。このマニュアルは「国立公園の入口標識は、それぞれの国立公園に固有のもの」と位置づけ、各公園が独自のデザインを採用することを許容。

ハーパースフェリーセンター訪問[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110726-3.html>

ユニガイド・プログラム

ユニガイド・プログラム (UniGuide program) は国立公園に関するデザインの体系化の取組。1990 年代に開始され、2003 年に「ユニガイド・サイン基準」(以下、新サイン基準)が策定された。ページ数は全体で 600 ページ以上。

妻のひとこと : ハーパースフェリー歴史公園

アメリカ横断ボランティア紀行（第31話）「国立保全研修所訪問」

2011.09.09

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110909-1.html>

国立保全研修所訪問[1]

国立保全研修所（National Conservation Training Center : NCTC）は、連邦政府機関連携型の保全に関する研修施設。アメリカ国内の自然環境の保全に関する研修を行う。ハーバースフェリーセンターの魚類野生生物局（FWS）版ともいえるメディアセンターの他、アーカイブ（収蔵庫／博物館）が併設されている。

リック所長

なぜ「保全（conservation）」に関する研修所が必要なのか。1990年代の初め、多くの若者が保全の世界に入ってきたが、保全のコンセプトが理解できない。スミソニアン博物館には西部開拓の歴史はあるが、利用（utilize）と絶滅（extinction）の積み重ねでしかない。

アメリカでは、原生自然地域を国立公園として開発の対象から除外することにより、『部分』は保護できるようになった。一方、国立公園以外の地域は徹底的に開発。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』出版により、全米規模の保全運動が盛り上がった。研修所は知識だけではなくパートナーシップを構築する場。

国立保全研修所訪問[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110909-2.html>

FWSの職員研修

保全研修所はFWSの職員研修も実施。専門的な知識と仕事のスキルとは全く異なるものであり、保全の分野で最も困難な問題は『人』により引き起こされる。外部関係者とのコミュニケーションや人間関係作り、問題解決、対立解消などのスキルを重視。幹部職員の養成や民間企業等の研修受け入れの意義。

最新技術の活用

保全研修所は、施設のオートメーション化と様々なコンピューター技術を活用。管理コストを削減しながら、予算的、人的資源を本来の目的である保全の理解推進に集中投下する。グラフィックデザイナー、写真家、映像製作スタッフなどが勤務し、動画資料を作成。「イメージライブラリー（映像図書館；Image Library）」が併設されている。

国立保全研修所訪問[3]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu110909-3.html>

研修プログラム

保全研修所の研修プログラムは、「研修コースカタログ」としてウェブサイトで公表。ウェブベースの研修プログラム『非講義型研修（non-class room training）』を提供。教材を電子化し、できるだけ講義のための時間を省く。

その一方で研修は知識の伝達よりも参加者同士のコミュニケーションを重視。1～2週間の講義の約半分は、参加者によるディスカッションに費やされる。宿舎には個室の他に談話室を設け、食堂も工夫。吸音効果を高めるため細かい横木を天井にはめ込み、食事時の会話を容易にしている。バーやラウンジを併設し、食後にも会話が続けられる。

「保全の問題では、多くの人々の利害が対立。利害や目的が異なる集団同士がいかに共存するか、意見の一致する点を見つけようと努力できるかどうかが重要だ」

メディア部門

メディア部門にはスタジオが設置され、魚類野生生物局と各国立野生生物保護区のための研修ビデオや一般来訪者向けの映像教材を作成。ダビング装置を導入し、汎用型のケースにカラー印刷したラベルを挿入するなど、コスト削減の工夫がある。

ミュージアム

ミュージアム（小規模な博物展示施設）には、ワシントン条約関係の輸入規制で没収された禁輸品の一部も展示。また、レイチェル・カーソンのFWSでの功績や困難に関する展示。『沈黙の春』にもつながる『conservation in action（動き出す保全活動）』。1960年代以降大きな盛り上がりを見せた保全活動にかなり早い段階から着目し、発信していた。

レイチェル・カーソンは比較的広い農地や資産を持っていた。男性職員の多くにはそうした財産がなく、養うべき家族もいる。1952年、レイチェル・カーソンはFWSを辞職し執筆活動に専念、1962年に『沈黙の春』を出版した。

（困み）レイチェルカーソン関係年表

環境保全活動

『沈黙の春』はアメリカ、そして全世界の環境保全活動に大きなうねりを巻き起こした。これは急速な化学工業の発達に、汚染物処理対策が追いつかず、多くの先進工業国において公害問題が発生してしまっていた状況とも重なる。当時の政権党であった共和党もそのような動きを無視できず、大気浄化法（Clean Air Act）や国家環境政策法（NEPA）などの歴史的な法律を次々と打ち出す。

FWSは、レイチェル・カーソンが組織を去らなければこうした画期的な著述ができなかったことを反省し、こうした業績を正しく伝える努力を続けるとともに、彼女の業績を記念するための保護区を設立している。

妻のひとこと：ワシントンDCへ

アメリカ横断ボランティア紀行（第 32 話）「魚類野生生物局でのボランティア開始」

2011. 12. 13

魚類野生生物局でのボランティア開始[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu111212-1.html>

最後の研修先、内務省魚類野生生物局では、国立公園と国立野生生物保護区の違い、野生生物に関する国際協力プログラムなどについて研修。

引越し荷物

引っ越し荷物にはやはり問題発生。アメリカの「ノープロブレム」に問題はつきもの！？ボランティアの部屋は高層アパートの 16 階。1LDK で狭くなったがルームメイトを気にしなくてもいいのは楽だ。

ボランティア開始

これまでのボランティアとは異なり基本的に室内での事務仕事。一年半アメリカにいるのに、未だに電話の対応もろくにできないという現実に愕然。

研修のねらい

研修のねらいは人材育成。ボランティア研修プログラムに参加する研修生の多くはロシア人で、日本人研修生は私が初めて。

ボランティア研修で大切なことは、いい人材を選ぶこと。本人とは面識があり、将来にわたって野生生物保護の分野で継続的に活躍してくれる人材を選ぶ。政府職員に限らず、NGO 職員や個人の場合もある。

（困み）参考：ウォード氏作成、国際ボランティアプログラム実施の際の留意事項（抄訳）

魚類野生生物局でのボランティア開始[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu111212-2.html>

経済課インタビュー

経済課課長のシャボノーさん (Dr. John Charbonneau) インタビュー。経済課では、特に重要な生息地にかかる費用 (Critical habitat cost)、自然資源に対する被害の評価 (Claim natural resource damage evaluation)、規制措置導入の際の経済的評価を実施。

自然資源に関する経済的な評価は、次の 2 つの価値を論理的に推定する。

- 1) 復旧のための費用
- 2) 消費者余剰、生産者余剰

科学プログラムに関するインタビュー

科学が重要なのは現場。正確な科学的な知見を提供すること。ワシントン DC 本部の役割はそのためになお金をかき集めること。

FWSの将来的な課題は、気候変動、外来種、及び遺伝子組換え生物。ただ、保全分野では、科学、倫理、政策の3つのバランスが課題。「優れた科学的知見があっても行政官が生かせない、予算不足で政策が実施できない、社会的な倫理観が成熟していないために、それを生かせていない」

テイコさん

日系アメリカ人のテイコさんはFWSの幹部を構成する長官補の一人。長官補は特別職であり、日本の役所でいえば「局長級」といわれる人たちだ。連邦議会と関係する仕事も多く、連日ワシントンDC市内にある内務省とFWSとを往復している。テイコさんは、FWS国際部門の予算取りまとめの総責任者。FWSの予算について教えてもらうことにした。狩猟切手収入からはじまり、猟銃、弾丸、釣竿、小規模レジャー船舶やその燃料に対する課税など、FWSの予算には多くの特別会計が存在していた。

妻のひとこと：ワシントンDCのカルチャーショック

韓国系のスーパーで納豆も豆腐も味噌も買える。ネギ、ごぼう、サバ、日本のラーメンもベトナム料理もある。生活は便利になったが、なぜか田舎での暮らしがとても懐かしい。

アメリカ横断ボランティア紀行（第 33 話）「ドンさんとの出会い」

2012. 01. 26

ドンさんとの出会い[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu120126-1.html>

国際部長インタビュー

魚類野生生物局国際部のトップ、ラファエルさんから話を伺う。「魚類野生生物局には多くの『生物学者』が科学部門に所属しているが、しっかりと仕事をしている職員はあまりいない。」生物学者は対象の生物しか見ておらず、魚類野生生物局としての政策という視点が欠けている。

正直なところ、国立公園も野生生物保護区もすべての国民を巻き込むことはできていない。それどころか、予算不足から入園料を徴収するようになり、さらにそれを値上げしようとしている。これでは、一部の裕福な人々しか利用できない。一般の人や貧しい人たちのことを忘れている。特別会計の財源を支えるハンター業界は魚類野生生物局ではなく、目的はカモ類。保全施策がより大きな力を得るためには、より広い人々の理解と支援が必要。予算も、特別会計ではなく、議会によって承認される一般会計予算の充実が必要だ。

米国の自然保護制度

米国では保護区域内は土地を国が所有するなど、保護のレベルは著しく高いが、区域を 1cm でも出せば、その効力は失われる。保護区の境界ぎりぎりには狩猟小屋が建っている。上流から農薬や肥料が流入してくる。個人の権利があまりにも強く、その権利に制限を加える政策は困難であるため、公園や保護区はその区域を越えて発生する問題に対して、ほとんど無力だ。

日本では国が土地を所有していなくても行為規制をかけることができる。これは日本の自然保護行政の苦肉の策といえるが、ある意味では日本の制度の方が実効性が高いといえる。

保全への理解を促すために

専門家を会議に集めても保全対策は進まない。対立している関係者の「共通項」を見出すことが大切。人々の理解を促すためには、都市型の保護区（Urban Refuge）が必要ではないか。

テイコさんからの招待

テイコさんのご主人のドンさんは、元内務省の次官補（Assistant Secretary）という要職にあった。ドンさんは当時、内務省内局の国立公園局と魚類野生生物局とを監督していた。ドンさんとの会食のお誘いをいただいた。

【図 1】アメリカ内務省組織図

ドンさん宅訪問

ドンさんは 50 代前半くらいの痩身の男性。アメリカでやせている人は珍しかった。リビングを見回すとテレビがない。とても落ち着いた雰囲気。

「アメリカの国立公園についてどう思う？」

ドンさんからの質問。ほとんどのインタビューでは一方的に話されるだけだったので驚く。

ドンさんの経歴

ドンさんは元野生生物局職員。通常は元州知事、元上院議員などが就任するポストだった。

国立公園の現場で起きる問題の9割は地元の業者がからんでいる。業者が政治家に陳情し、政治家は中央政府機関に圧力をかける。次官補が抵抗しなければ、そのまま各国立公園の所長に圧力がかかる。魚類野生生物局には闘う気概があるが国立公園局はそうでもない。

また、国立公園にしても国立野生生物局にしても、クジラの保護ほどは市民の理解が得られているとはいえない。アメリカの社会全体としての自然資源政策に関する社会的合意は、『自然資源のごく一部を次世代のために残しておく』(“We have decided to set aside a small portion of resources.”)ということ。国立公園にしても国立野生生物保護区にしても、国土面積に対する割合は小さい。

【図2】アメリカの主な国有地の割合

ドンさんとの出会い[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu120126-2.html>

国立公園局と野生生物局

国立公園局は、いろいろと政策を打ち出すが、実際何をやっているかはわかりにくい、『話すが実行しない(talk but not act)』役所だ。科学に基づいた管理といっても、本音は公園に人を呼びたい。

魚類野生生物局は科学が尊重されてきたが、政治的な圧力のために変質しつつある。

国際協力プログラム

魚類野生生物局の国際協力事業は米国でもっとも優れているが、国立公園局の事業は対照的で、非常に閉鎖的。研修生の評価も低い。

予算について

国立野生生物保護区と国立公園では、管理面積はほぼ同じであるが、職員数と予算額は国立公園局の方が大きい。

図3 国立公園、国立野生生物保護区面積比較

図4 職員数比較

図5 予算額比較(2005年度)

国立公園局は巨大な予算を湯水のように使う。予算確保のためには政治家に従順に従うのが流儀。魚類野生生物局は政治家の無茶な横やりには抵抗するのでさらに予算の削減につながる。国立公園局は一度手にした予算は、自分たちの好きなように使えると考えている。予算書は複雑で、面倒な案件やおかしな予算をまぎれこませる。地元の政治家と各国立公園ユニットの所長は常に連絡を取り合っている。国立公園の施設整備は、地元選出の政治家にとって効果的でわかりやすい地元貢献策。

アメリカでは国立公園はただの公園ではなく、国民共有の財産。民主主義の国であるだけに、「利用者数」は「有権者数=票」。利用者数は政治的な力とみなすことができる。利用者数を確保しようとする国立公園と、あくまで野生生物の保護を優先する国立野生生物保護区とでは、予算と組織の規模が違うのも当然。

図6 利用者数比較

図7 利用者一人当たり予算額比較

図8 職員一人当たり利用者数比較

ブルーカラーの役割

国立公園局にも革新的な動き。イエローストーン国立公園から発信された『公園のグリーン化 (greening parks)』という政策は「ブルーカラー」職員がリード。国立公園局の職員は明確な分業と階級があつてまるでカースト制度だが、それを変革する動きがある。

職員数で管理面積を除してみると、日本の国立公園とアメリカの国立野生生物保護区が類似。魚類野生生物局と日本の国立公園を比較の対象にして3者比較とするアイデアが浮かぶ。面積としては直接比較できない日米の保護区どうしであっても、職員一人当たりなどの単位に換算してしまえば比較は可能。

図9 職員一人当たり保護区域面積

妻のボランティア参加

妻も週に3日のボランティア勤務を開始。関係者のデータベースの整理。膨大な情報が集積しているにもかかわらず十分生かされていない現実。

妻のひとこと：ワシントンDCの冬

アメリカ横断ボランティア紀行（第 34 話）「国立野生生物保護区訪問」

2012. 09. 20

国立野生生物保護区訪問[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu120920-1.html>

チンカティーグ国立野生生物保護区

チンカティーグ国立野生生物保護区（Chincoteague National Wildlife Refuge）は、Snowy Goose というガンの一種を保護するため、1944 年に設立された野生生物保護区。

図：ブラックウォーターおよびチンカティーグ国立野生生物保護区の位置図

図：チンカティーグ国立野生生物保護区 区域図

図：チンカティーグ国立野生生物保護区 拡大図

新しいビジターセンター

Herbert H. Bateman Education and Administration Center の施設のさまざまな工夫。

国立野生生物保護区の管理方針

魚類野生生物局は野生生物の保護が第一。そのため、利用者からの評価の高い国立公園局の予算と、魚類野生生物保護区の予算規模とでは 18 倍もの開きがある。ビジターサービスは比較的充実しているが、モニタリングはインターンを配置することにより対応している。

グラフ：アメリカにおける国立野生生物保護区の箇所数の推移

表 1 保護区システムの利用のヒエラルキー（The hierarchy of Refuge System designated uses）

国立野生生物保護区訪問[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu120920-2.html>

Blackwater 国立野生生物保護区見学

Blackwater 国立野生生物保護区は、渡り鳥のための保護区として 1933 年に設立された。保護区はメリーランド州にあり、面積は 23,000 エーカーほど（約 9300 ヘクタール）もあるが、区域は複雑に入り組んでいる。ガンカモ類の餌としての作物栽培。日本のシカが在来種！？

図：ブラックウォーター国立野生生物保護区 区域図

地元との協力

保護区は地元にとっては観光資源。ハンターグループとの協力。

保護区と外来種問題

ヌートリアの駆除を農務省との連携により完了！

ビジターサービスとボランティアの協力

ボランティアが主体となって管理するビジターセンター。フレンズグループから年間約 5000 万円の寄付金。

魚類野生生物局の資源管理方針

魚類野生生物局自身には歴史的な文化財などを保存する権限はなく、国立公園局との大きな違い。日本の自然保護行政との共通点でもある。各種問題を、関係機関との連携により解決する。所長であるラリーさんの姿勢からもそれが伝わってくる。

妻のひとこと：チンカティーン、ブラックウォーター訪問

アメリカ横断ボランティア紀行（第 35 話）「魚類野生生物局の予算」

2013.03.01

魚類野生生物局の予算[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu130301-1.html>

保護地域における料金収入

国立公園局は魅力が高いため高い入場料金を取ることができる。料金を高くして管理費用を賄いながら利用者数も抑制できる、保護区の有償化は安易でかつ効果の高い手法だ。

一方、入場料金を払える人々は市民全体のごく一部に過ぎず、潜在的に貧しい人々に対する潜在的な差別になっている。アメリカは目の前の予算に目がくらんで安易に料金収入に頼っている。入場料金を単なる管理費用の捻出策と考えてはならない。

魚類野生生物局の抱える問題

魚類野生生物局は特別会計に依存する割合が大きい。ハンターや釣り人など、特別会計の財源となるような税を負担している人々の意思や意向が政策に優先的に反映される。また、負担者の興味の対象となる生きものがより大きな恩恵をこうむることができる。アメリカの野生生物保護行政の現状。

科学に基づいた野生生物管理

科学的な情報に基づく野生生物の保全は理論的には可能かもしれないが、人間が介入する限り必ず政治的な配慮が求められる。ハンティングによる個体数管理とライセンス料金による保全費用の確保などの例。

アメリカの野生生物保護区が抱える問題

将来的に、保護区の管理は、これまでの野生生物第一という方針から変化し、利用者や周辺住民などに重点が置かれることになる。保護区の問題の多くは区域外に原因がある。外来種、河川の汚染や水量不足、大気汚染などで、悪影響は年々深刻になっている。保護区の管理者にとっても、区域外の住民や州政府などとのコミュニケーションが重要。

魚類野生生物局の概要

魚類野生生物局（Fish and Wildlife Service ; FWS）は、アメリカの国立野生生物保護区システムの管理及び絶滅危惧種法等の野生生物の保護と管理に関する法律を所管する。11 の長官補と 7 の地域事務所が局長を補佐する管理組織（Directorate）を構成している。

魚類野生生物局の代表的な所掌事務、職員数、組織の特徴など。

【図 1】米国魚類野生生物局組織図（PDF：24KB）

魚類野生生物局の年間予算

FWS の予算書（Budget Justifications、通称グリーンブック）によれば、私が研修を行っていた 2004 年度の魚類野生生物局の予算額は合計 19 億 7,154 万ドル（約 1,676 億円）、うち一般会計分が 13 億 343 万ドル（約 1,108 億円）、特別会計分が 6 億 681 万ドル（516 億円）であり、予算額に占める特別会計の割合は 34%。2012 年度予算案では予算総額も増えているが、特別会計の割合は 40%に達している。

【表 1】米国魚類野生生物局予算額推移

国立公園局は、2004年度予算額は合計25億5,699万ドル（約2,173億円）であり、魚類野生生物局の予算は国立公園局の予算の8割弱。予算額に占める特別会計の割合は11.7%と小さい。

【表2】米国国立公園局予算額推移

妻のひとこと：プレゼント交換会

アメリカ横断ボランティア紀行（第36話）「ドンさんインタビュー（2回目）」

2013.06.10

ドンさんインタビュー（2回目）[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu130610-1.html>

クリントン政権時代の政府高官、元内務次官補のドン・ベイリー氏のインタビュー2回目の模様を紹介。

ドンさんインタビュー

インタビューはワシントンDCの東にあるチェサピーク湾の対岸にあるドンさんの別荘で行われた。

政府職員としての心構え

政府職員は現地に一度も行かなくても政策決定が可能。当事者にとっては死活問題であっても、実際に会って説明する責任はない。事務所に隠れながら自分の持つ権力によって物事を決めることができる。この、政府の有する「匿名性」や「無責任体質」に大きな問題がある。関係者や部下の話聞くことは、信頼関係を構築するための唯一の方法。時間や手間はかかるが、組織や責任が大きくなればなるほど、このような努力が必要になる。

国際的な野生生物取引に関する問題

ワシントン条約会合での日本政府代表団との交渉の思い出など。条約交渉においては交渉官どうしの信頼関係が重要だが、それだけで交渉が妥結するわけではない。

絶滅危惧種法

アメリカの絶滅危惧種関係法令の歴史。アメリカでは一般に、国内で規制を行うことは難しいが、国外での規制に関する対策は連邦議会を通りやすい。国内で実効性のある法律が成立したのは環境問題が盛り上がったニクソン政権時代だった。

組織を良くするために（メンタリング）

よい組織をつくるには、部下のメンタリングが重要。上司を変えようとしても難しい。早い時期に人材を見出して、そして育てることに組織の将来がかかっている。若手を育てることは役職者の役割といえる。

ドンさんインタビュー（2回目）[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu130610-2.html>

現代アメリカの民主主義

民主主義が健全に機能する前提は、しっかりとした価値観と判断能力を有する中産階級が存在していること。現代のアメリカはそうした層が少なく、かつ質の悪い情報があふれている。価値観や判断能力を身につけるには家庭での教育が重要であるが、ほとんどの人たちは自らを教育する余裕を持つことができない。劣化するアメリカの民主主義の現状は日本など他の先進国にも通じるものがある。

魚類野生生物局への影響

ブッシュ政権下で、魚類野生生物の生物学者は、生き残りのために信頼性や適切な政策決定のプロセスを狂わせてしまった。現場の科学者自身が科学的な事実を隠蔽する場合もある。今後の信頼回復が不可欠。一方、国立公園ではもともと科学部門が脆弱で、利用者誘導、混雑解消、取締りなどに熱心で、最近まで公園の資源管理は二の次だった。組織の健全化におけるメンタリングの役割、民主主義を補完する直接的な寄付やボランティアの役割などに気付かされた印象深いインタビューとなった。

妻の一言：ドンさんのパートナー、テイコさんから学ぶ女性管理職の意義とむずかしさ。

【参考】アメリカの絶滅危惧種法の制定経緯

【表】絶滅危惧種法の主な内容

アメリカ横断ボランティア紀行（第 37 話）「さよならワシントン DC」

2014. 02. 13

さよならワシントン DC[1]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu140213-1.html>

アメリカでの研修終了と帰国前の様子。環境省からの出向者とともにシェナンドア国立公園などを訪問。

ボランティア終了

魚類野生生物局（FWS）本局国際課での 3 か月間の研修を終了。日米の渡り鳥保護協力に関する展示パネルや、関係者のデータベースを提出。

マンモスケイブ国立公園とレッドウッド国立州立公園の振り返りと報告書執筆の様子。取りまとめた研修報告の結論は 3 つに絞り込まれた。

1. アメリカの国立公園と国立野生生物保護区、日本の国立公園の三者比較の結果、日本の国立公園はむしろ国立野生生物保護区に近いこと。また、マイナーな国立公園や小規模な国立公園にも実用的なヒントがある。
2. それぞれの国立公園にモニタリングを担当とする部署があり、公園内の自然環境や文化財の状況を把握し、科学的な情報を収集し分析していること。このような機能があることで、公園内で行われる工事などの事業評価が実効あるものとなり、インタープリテーション部門にも正確な情報がもたらされている。また、余剰ボランティアを吸収することにより、ボランティア制度の運営を充実したものとしている。
3. 保護区管理におけるボランティアは単なる働き手ではなく、保護区の理解者、応援団であること。若手人材を発掘したりする機能も果たす。

（報告書 PDF ファイル掲載）

- ・ 研修報告書本編（PDF : 1.34MB）
- ・ 資料集 1（PDF : 7.7MB）
- ・ 資料集 2（PDF : 5.47MB）
- ・ 資料集 3（PDF : 6.06MB）
- ・ インタビュー集目次（PDF : 187KB）
- ・ インタビュー集（PDF : 1.36MB）
- ・ コスタリカ域外研修報告書（PDF : 2.49MB）
- ・ 報告書の概要版（PDF : 1.28MB）

さよならワシントン DC[2]

<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu140213-2.html>

引っ越し準備

荷物や車を処分し、報告書もようやく印刷に持ち込む。

ボストン訪問

旧友のスコット君を訪ねる。人気ラジオ番組のスタジオなどを訪問。柔らかくておいしくて安い、アメリカの豚肉の「秘密」もようやく解明。

ニューヨーク訪問

市内観光地をまわる。滞在中にようやく英文報告書も完成。

環境省からの出張者来訪

帰国日のちょうど6日前、環境省の先輩レンジャーが急きょワシントンDCに。一緒にシェナンドア国立公園などを訪問。

国立公園施設見学

シェナンドア国立公園では、主要なトイレをことごとく見て回る。公園のトイレの「裏側」なども見学させていただいた。

ハーパースフェリーセンターでは新しくまとめられたサインマニュアルの説明を受ける。

マザー研修所では、アパラチアントレイルを維持管理している「アパラチアントレイル・コンザーバンシー（ATC）」の職員との意見交換。ATCはボランティア精神の結晶のような組織だ。

妻の一言：アメリカでの携帯電話

アメリカで携帯電話を使ったのはワシントンDCのみ。英語ができないと思われていたのか、現地のアメリカ人は誰も電話をかけてこなかった。